

紙七部集  
上

中村俊定文庫  
文庫 18  
749  
1





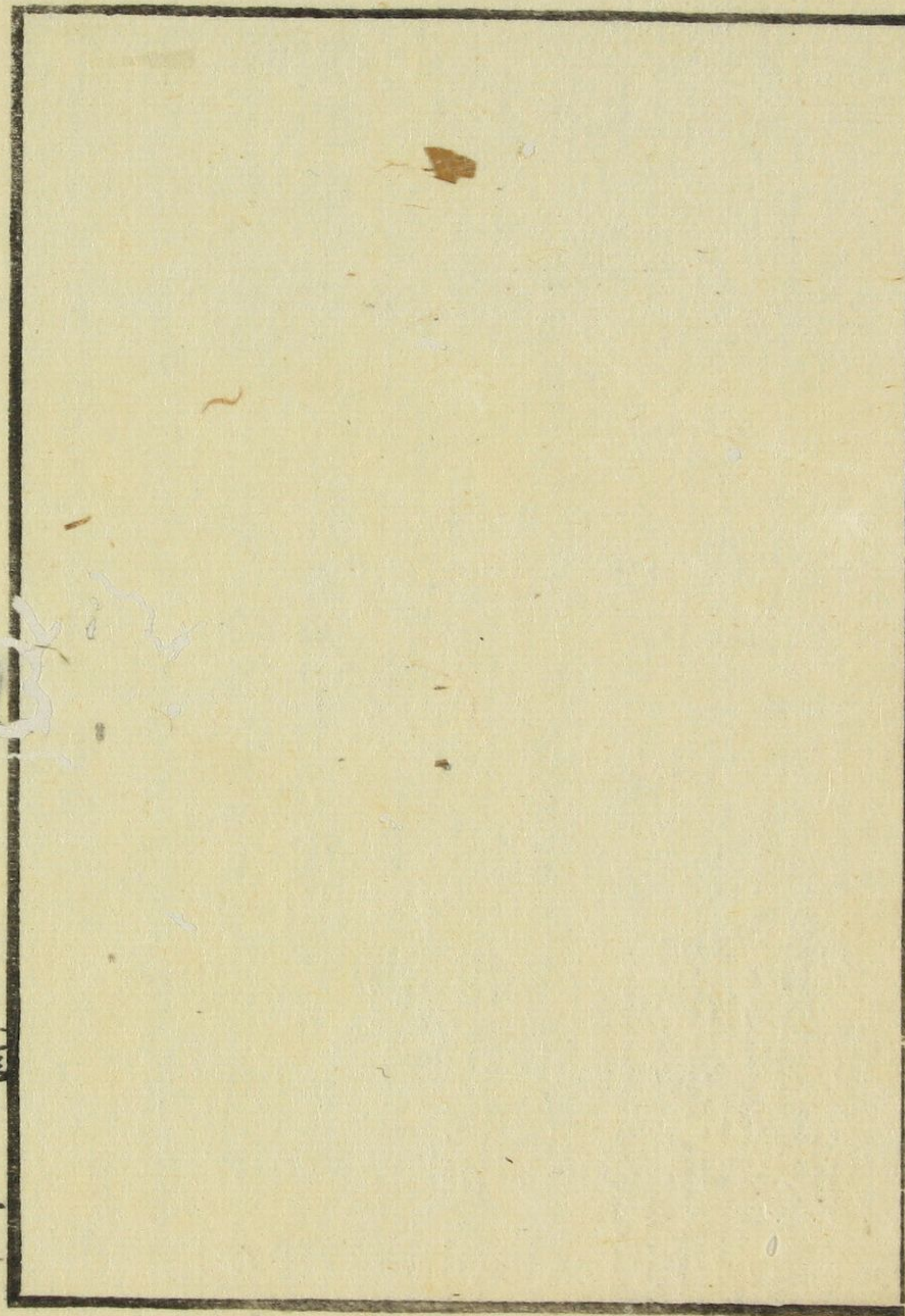
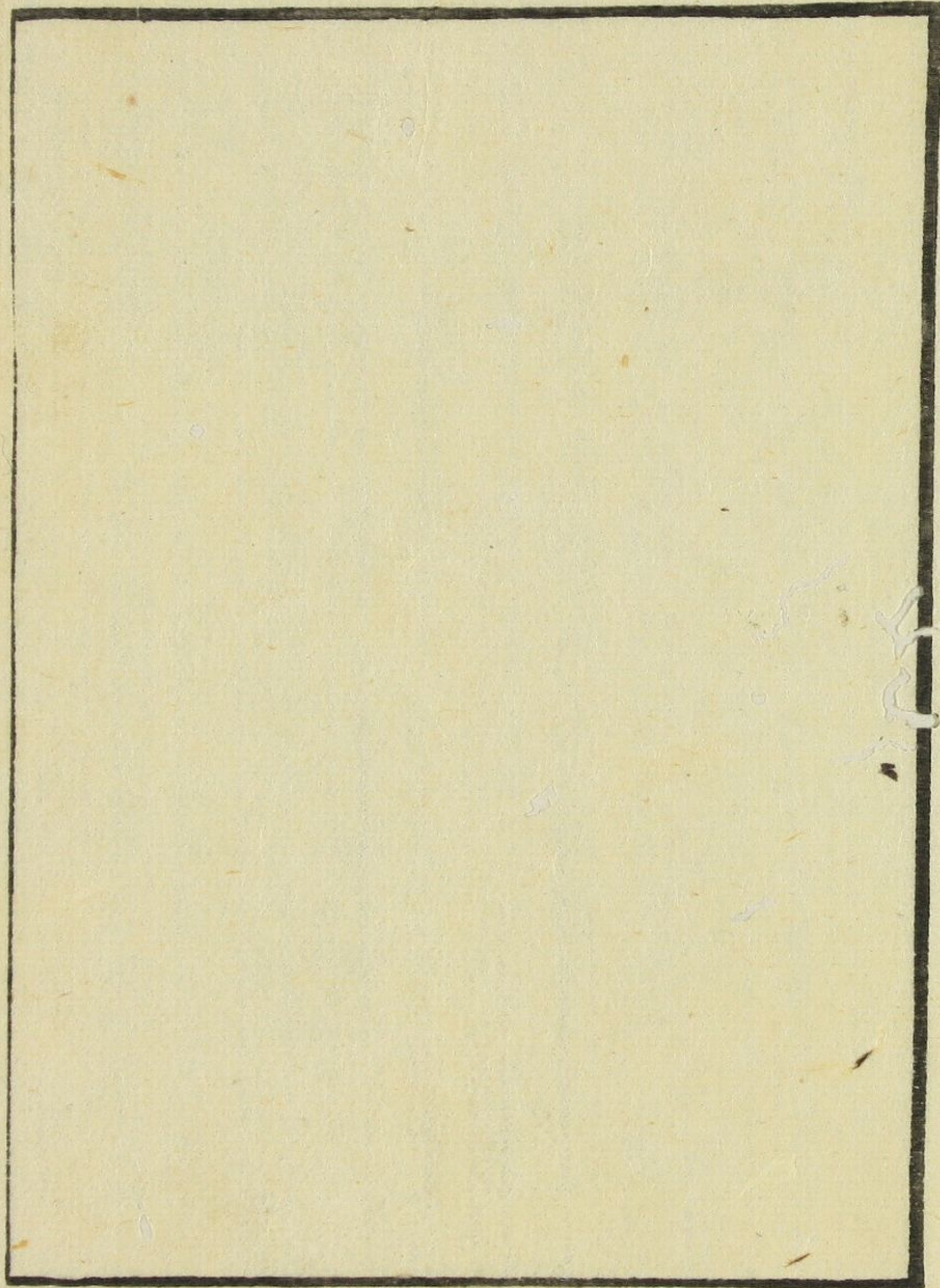
其の三日月の入りまうりたるは子田を其からしむ  
 のよはらう國人ありはるるはつとらふまうり  
 かしらうちのたまはつとらふまうりはれん  
 を世後其の度くせうめて侍人するあつたの  
 ありくけら後統一人の権勢かす人其の  
 ありくそのまわくしらうちのたまはつとらふ  
 うらうちのたまはつとらふまうりはれん  
 ありく権勢の中らうちのたまはつとらふ  
 ありくありくありくありくありくありくありく  
 出のすくせありくありくありくありくありく  
 ありくありくありくありくありくありくありく

序 一

のは編みたるはつとらふまうりはれん  
 ありくありくありくありくありくありくありく  
 ひしすありくありくありくありくありくありく  
 物まらありくありくありくありくありくありく  
 ありくありくありくありくありくありくありく  
 ハ七部を編つたのありくありくありくありく  
 とらふ七部ハ清経書の七經ともいへん  
 ありくありくありくありくありくありくありく  
 ありくありくありくありくありくありくありく  
 ありくありくありくありくありくありくありく  
 ありくありくありくありくありくありくありく

替者水母散人吳竹のうらやの甲う

ありくありく



序  
二

春乃日

曙をよむとんくのうらむあひと徳田のうらむあひとぬ  
海へまきうしくなるあはは茶松のうらむあひとぬ  
ゆきあはらなる重五を枝形をける竹塙をちるま  
ならうらむあひとぬあひとぬを柱ぬあひとぬ

二月十八日

荷子

まきあはらなるあひとぬのうらむあひとぬ  
橋あはらなる中へなるあひとぬ連  
山うすむ肉つぬあひとぬ  
ゆきあはらなるあひとぬあひとぬあひとぬ  
あひとぬあひとぬあひとぬあひとぬ

昌圭

李凡

兩相

重五

〇八

くものうらむあひとぬのうらむあひとぬ

執事

瀬戸寺に汗の惟子脱之あひとぬ

重五

まのくくあひとぬあひとぬあひとぬ

荷子

又王のうらむあひとぬあひとぬあひとぬ

李凡

兩のうらむあひとぬのうらむあひとぬ

兩相

机をうらむあひとぬあひとぬあひとぬ

荷子

傾城 氣まきうらむあひとぬ

昌圭

秀をうらむあひとぬあひとぬあひとぬ

兩相

りやうくとのうらむあひとぬあひとぬ

重五

あひとぬあひとぬあひとぬあひとぬ

昌圭

あひとぬあひとぬあひとぬあひとぬ

李凡

柳下をうらむあひとぬあひとぬあひとぬ

重五

入りくく月一 壇のそくになり  
 うけくくことまきさるる家と塵れく  
 かな懐平 梓まうくおれ  
 足帳をたふぬるわふふ切然し  
 ひとまうくことまき 右後の汁三  
 松の舟くく官目く門ハくゆくまて  
 ちくくく のゆもくくくゆめゆそ  
 於朗 豆膚をさきふくくまき  
 念佛くくゆまきくく教あそくれ也  
 徳兼多 けし入るをゆめゆ院ま  
 盆まを松の 名ふくくく月  
 傘の内を付にきく 西の昏く

荷子  
 李凡  
 西相  
 若子  
 昌圭  
 重五  
 西相  
 重五  
 昌圭  
 李凡  
 重五  
 若子  
 李凡

軽然あうく 物家やうく  
 ちくくまきゆりまきくまきトまきん  
 物籠ひくくくを二人くくまき  
 ちくくあそぬ局海に年あそく  
 紀念くくく入 塚塚の昔畑  
 ひとまきを花て行くまきく  
 舟もりまき 名まきく 由く

西相  
 荷子  
 昌圭  
 兩相  
 重五  
 昌圭  
 李凡

二月六日 柳まきあう  
 まき日 柳まき 柳まき 山のか重くまき  
 柳まきくくまきまき ちくくくの纏  
 まきの懸 名付まきくくん積まきく

且葉  
 聖水  
 荷子

口すくくへきほむらうりく  
 松風ふたぎれぬ程のゆれ  
 奏のこしーうらまゝのり有  
 笠白きを奉ふまゝのり  
 葉のりつりーよん子えそそ  
 表町ゆつりー二人懸割ん  
 焼りー車ゆくすー  
 鯨魚のりー大津のゆへ入る  
 何やういふん 多國の越人  
 藤長あつはまうを越やうり  
 花ふりーうまをるり口のり  
 甲人へ 藤を越と 焼の 越人

月かきさ流ふまを石とく 越  
 とろひのり子のねえの越とん  
 楓をさす 葉の 温泉の 山  
 のりーや 純葉の 越 越人  
 内侍のえりぬ代々の肩の國  
 物おゆの軍の中へ 序のり  
 名もつら 葉とらーヤ上子  
 大軍の念伴とまのり 越 越人  
 のりーや 葉の 越 越人  
 ねえのりーまのり 越 越人  
 またよせ日とまをさ 越の 越  
 一取うる 名へるり 越 越人

くら 魂まうらうまらあゝまの月 且葉  
 陽空のわりのまらあゝまの月 越人  
 まらあゝまの月 荷子  
 田まらあゝまの月 羽笠  
 カの節まらあゝまの月 羽笠  
 陣まらあゝまの月 且葉  
 まらあゝまの月 越人  
 まらあゝまの月 荷子  
 まらあゝまの月 羽笠

三日月十日 且葉 田家  
 蛙のまらあゝまの月 野水

類まらあゝまの月 且葉  
 藤まらあゝまの月 越人  
 まらあゝまの月 荷子  
 まらあゝまの月 冬文  
 芦の穂まらあゝまの月 越人  
 残まらあゝまの月 且葉  
 岩のあゝまの月 豊水  
 雨の月まらあゝまの月 荷子  
 ひまらあゝまの月 越人  
 解まらあゝまの月 豊水  
 今まらあゝまの月 冬文



同十九日荷子室あり

咲くよけの菊よふれき白露を  
秋のあそびありくは 順  
初丁のまよふ山さきまきぬ  
別の身にかきこゝあくまき  
あぞ花の宮より唐錦を  
まゆくろの 筆もひらく  
あき月やをねをけりふあふん  
紫のまよふまよふあの中  
紹路の 瓢ハありくまききく  
連舟のまよふあくまききく  
流まよふ紫押まきまきまきん

越人 且葉 冬文 花子 且葉 世あり 荷子 越人 越水 越人

あそびありくの 筆もひらく  
あき月やをねをけりふあの中  
紹路の 瓢ハありくまききく  
連舟のまよふあくまききく  
流まよふ紫押まきまきまきん  
あそびありくの 筆もひらく  
あき月やをねをけりふあの中  
紹路の 瓢ハありくまききく  
連舟のまよふあくまききく  
流まよふ紫押まきまきまきん

且葉 冬文 荷子 越人 越水 越人 且葉 冬文

墨きくはてしなく雪を待たせり 荷子

追加

二月十九日舟泉亭

越人

少頃のあつらひき酒のくすねか

膝のあつらひきゆりゆり

きりりきりりや候晒すき雪のうて

初雪のうらみきりり

初雪を待たせりしり

片きききききききききききき

荷子

舟泉

膝雪

龜籠

荷子

執筆

春

昌隆の 柳六をぬ所代のみ

元日のあめらの 籠る墨の

利重

重五

初まの遠里牛乳かき目か

りこのまき海六をけりき

門ハ松芳茶園の雪まじり

鯉なる水あめ 園く梅白

舟くの小松ふ雪の跡く

暖の人の形おそきよひ

腰てきき元日雪の 膝く

墨きききききききききき

くくくくくくくくくく

初日三か柳の初く白のうれ

先以て雪の遠ひきき

芥橋とてとけきゆき

昌圭

柳桐

舟泉

羽笠

且葉

社國

犀文

吞霞

聴雪

荷子

全

且葉

のこぼれぬるの終人初とそ

みろくを白盤のやー夕夕夕夕  
古津や 陸飛こぼるのた  
傘下代の睡る 湖鏡の中うけ  
山や花 牆根くらの海をやー  
花よりつゆのたぐさるう中よ花うま

春野吟

はるはる 桜を曲る 菴 二つ  
林邊寺かたきさるりのくさるうけ  
桜木すて 桜の 逢きさるうけ

餞別

為の花さくうけのそ別くれ

越人 苦菜 重五 龜羽 越人

杜国 李凡 荷兮

越人

山細り 夕陽の せうさつのみ目くれ  
越人の 夕陽の せうさつのみ目くれ

重五

全

夏

やうくさつ その 山をの 尾八巻ー  
附る さゆの 夕陽の せうさつ  
かつとも 桜の 脊戸の 一里塚  
うまー さつ 夕陽の せうさつ  
あけの うまー さつ 夕陽の せうさつ  
傘をたたくまて 夕陽の せうさつ  
武家 夕陽の せうさつ  
すくさつ 夕陽の せうさつ  
夕陽の せうさつ

九白 李凡 越人 杜国 龜羽 舟泉 商路

るうくくあられううりまの月

種雪

老駟曰知足之足常足

夕うわゝ難炊あつとせあふふ

裁人

管束の徳雨こがましく時あふ

柳雨

うゝまふふたうむむの中あふ

塵文

蒼草八はふあまきさたのり色

荷子

蓮池のふくさうりすうく信あふ

全

曉乃立陰さあふの逢きうあ

月圭

夏川のまふあふうる本あふ

重五

譬喻品ノ三畏無安猶如火宅

とらるるんを

六月の汗ぬぐひあふるあふれ

裁人

秋

脊戸の細さうびあふるあふれ

且景

あふあふのあふ

玉ふあふあふあふあふあふ

裁人

アまうくまうく二あふするあふ

雨相

あふあふく人をあふあふあふ

芭蕉

あふあふあふあふあふあふ

裁人

あふあふあふあふあふあふ

あふ

あふあふあふあふあふあふ

全

待戀

こぬあふをあふあふあふあふ

荷子

閑居雑感

秋のころ 琴の柱もぐねて暮ぬ弊  
船員ハナシ 一ツんハ 取スル

荷分  
舟泉

冬

るハぬれ 牛ハ夕見の村をくれ

杜園

芭蕉の巻を著し侍りて

大塚住

中ををき 猿の巻の 蛇ををき中

如行

雪の 原草の みの 雉 くれ

昌碧

一ををき ちかむ 雪のあゝ

芭蕉

川鏡の 跡け ちかむ 雪のくれ

越人

芭蕉の巻を著し侍りて

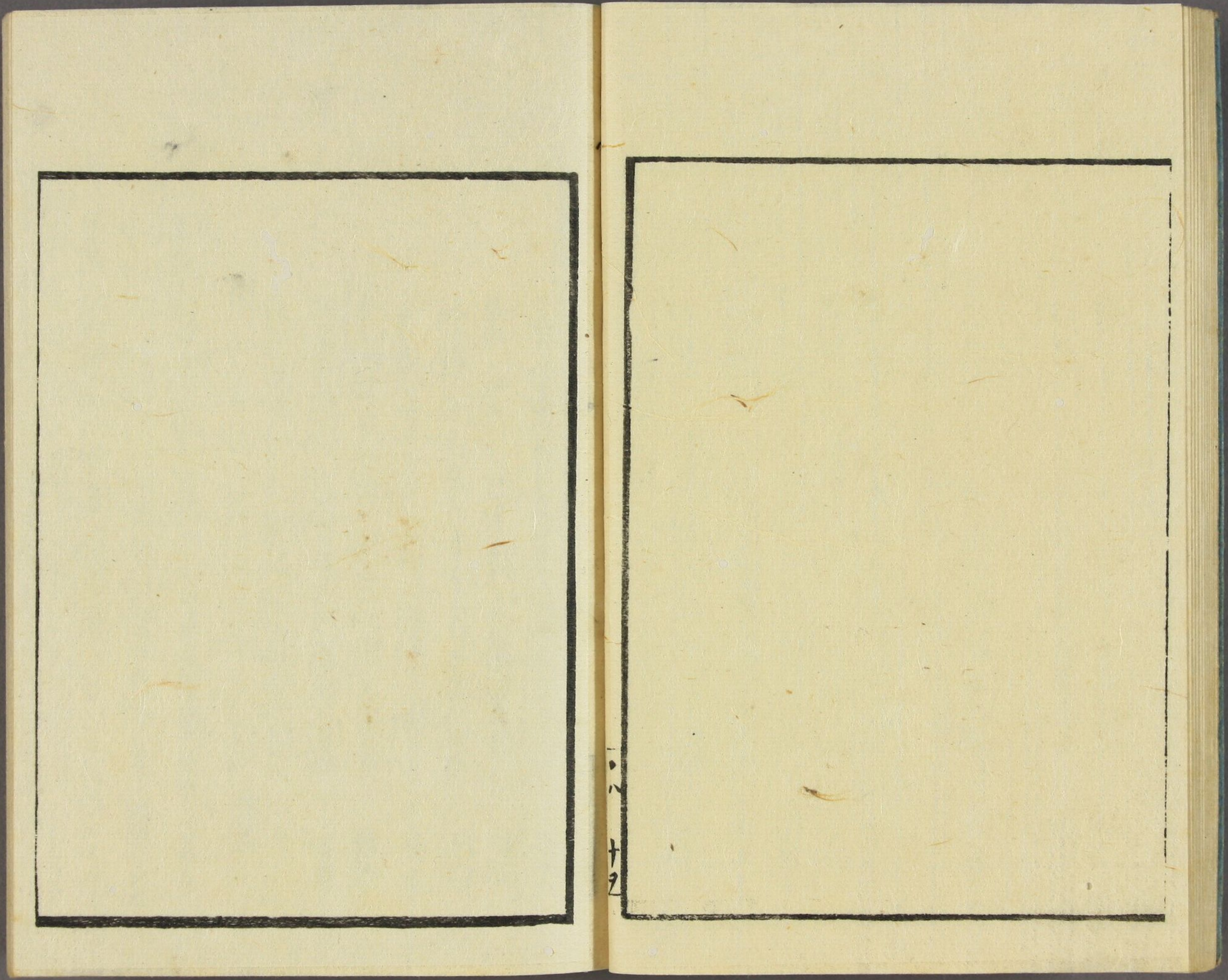
この比の ちかむ 雪のくれ

杜園

場をよかりある 雪をのりけり

あゝゝゝ 雪の巻を著し侍りて

荷分



十  
二

みづの日

此書六本並録の雨ふりたる日ありのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ  
そめりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ  
昔の文に記すに國にありしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

く 程白とあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

芭蕉

中よりやうがいはつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

井水

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

荷分

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

重五

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

杜国

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

正平

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

野水

一〇九

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

芭蕉

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

重五

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

荷分

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

芭蕉

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

杜国

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

荷分

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

野水

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

村国

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

重五

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

野水

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

芭蕉

あつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝのあつたてりしつゝ

重五

いふを七帳の 矢をさるる川を  
ぬす人の 紀念の松の 影をぬく  
あまのつと 室紙の 名を付し  
あまのつとく 多ねをぬく 水付の  
あまのつとく 唐草  
あまのつとくと 碑をぬく 人の 骨をぬく  
鳥賊ハ 多の 子の 園の うらうら  
あまのつとくの 謎をぬく 一 郵  
秋水 一斗 一斗 つくと 夜を  
日東の 雲白う 坊の 月をぬく  
中一 本 権をぬく 深 深 寺  
うらうら の 影をぬく 夕をぬく

荷子 芭蕉 杜国 野水 重五 芭蕉 荷子 芭蕉

鶴の 影をぬく  
うらうら の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく

杜国 荷子 芭蕉 杜国 重五

杜国も 芭蕉

あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく  
あまのつとく の 影をぬく

杜国 芭蕉 荷子

芭蕉



麻片の月神の鞆鼓をうらやまへ  
桃の花をこころとせし 貞徳の富  
西の野をうらやまの田圃あつらへ  
奥のきつらへとせし 只るたふさく  
床のかけく 寝れをいそぐる男  
強きまへつけの眼をのこころ  
只のしと瘤をちまぐる 地うらまき  
明白くうらまゆるふとせし せん  
小のちまゆる壺とせし ひととせし 飛  
月入 ちまうれ 牡丹ぬす人  
縄あまのかりんがれ 藤をたふさく  
こころく とれと地を切切所

重五 正平 杜風 塾水 荷子 長須 母水 重五 社四 芭蕉 荷子

初を初めの日とせし 娘のうらやま  
うらやまのしとせし のちまゆるふとせし  
根をこころとせし 藤をたふさく  
うらやまのしとせし 只るたふさく  
藤をうらやまの 根の葉をうらやま  
三弦 うらやま 不被のせし 人  
うらやまのしとせし 只るたふさく  
藤をうらやまの 根の葉をうらやま  
七十一  
加ふはは常とせし ちまゆるふとせし  
ひとりの傘のしとせし ちまゆるふとせし  
草の池のしとせし ちまゆるふとせし  
まじらふとせし ちまゆるふとせし

社四 母水 重五 芭蕉 荷子 杜風 塾水 重五 社四 芭蕉 荷子

月よつてくる唐編の整の赤松く  
意もよめさうめく臨済をすの  
秋塔の虚カクよささうく志川くさ  
花の葉つて入葉下ゆりり  
後より石をひくき山くさ  
和より入典侍の局く肉付く  
三々れを鸚鵡尾あうのきいさ  
あく雲りさむ裁の猫居菊

荷子  
芭蕉  
重五  
芭蕉  
杜国  
重五  
荷子

つる狐ひく事僅十歩  
津よりねて月より花を無花  
とありぬり多のいふつま

杜国  
重五

蓮葉の葉あきおわくかまふ夏く  
水の山にまわくわけのさ  
る雲捨あつて風のあうす  
葉の湯者あつて葉の薄ホ英  
海よりうけつ物よむ娘うつま  
煙をたうつてあさけらつて  
つゆ葉のすのよ力を撰りまは  
若葉あまき青くシカシキ葉の坊  
初月秋双六うらの糖う  
おを賞みらしたほくまはま  
あのみほのりさそを離をぬく  
とを婦のよりより采るんとと

野水  
芭蕉  
荷子  
正平  
重五  
芭蕉  
杜国  
芭蕉  
重五  
芭蕉  
重五

ずりきりまは海の高にうれ竹  
 併し終りつる 真解きき とうり  
 縣ふるもそれ先び初と作うれと  
 又形董の 畠 山 及  
 白うりくく又 鴨をを在らよくと  
 白の 背の するの 解うさうりや  
 ありさうたや矢刻の 指の 多うもふ  
 衣を 玉の まの 玉をよみて送らぬ  
 袴 一 ちん 柴新 長よの ちん  
 海目をさうむく 刀 賣らよ 年  
 唐の 和 呉の 國の ね 差 免ら 卜 文  
 襦 一 一 多 縫り 行 襦を ことく

荷兮 芭蕉 重五 杜必 芭蕉 野水 荷兮 杜因 荷兮 重五 芭蕉 野水 荷兮 杜因 荷兮 重五 芭蕉

あつ人と 指を 推ま 香ゆさうん  
 茂子のあつと人よ 名をさるに 禪  
 三日月のあつ 咳く 鐘の 聲  
 焼ぬらぬらよ 琴う 人 者  
 亭の 半を ゆきし 七を 煮 炊く  
 聲よ とうき 念佛 義を ぬく  
 うけろ 子さきり 狸ま ぬ 起 徒  
 ちのい うねつ も 癒る の 常 行  
 くら 是 飛 けい 一 お 花 の うけ 入  
 その 手 出 目 を ぬ も ち ら ぬ

重五 杜因 芭蕉 野水 荷兮 杜因 荷兮 重五 芭蕉 野水 荷兮 杜因 荷兮 重五 芭蕉

白ははばあめ 火 燈 籠 ぬ け くれと

炭賣りの女のつまこをそめて  
 ひくの糖と夜をと流 磨 寒  
 花棘馬骨のやうな 咲うへん  
 踏らるるまきの月うさうさう  
 う勢ひぬぬ杖の目録に海あき日  
 花織るいづきを市に振す  
 賀々川や胡麻子代あつ微を  
 のをあら のを身あつし のを  
 ねののこ布揃 奇よりつれを  
 うまふふをこらを 然る 三平  
 控しねくくねううをの難れを  
 火とくぬ火籠あき人をえん

重五

荷子  
 杜国  
 野水  
 芭蕉  
 羽笠  
 荷子  
 ちよ  
 杜国  
 羽笠  
 芭蕉

門ちのねえあまうまてあま  
 血カうくま 月の晴きより  
 芳りくく本々の鏡七川きく  
 あまきり 納豆うくくま  
 もまよ泣様の徴とすてうま  
 傍りのいそに 歎きをせ香  
 白燕 湯くぬ水よおを流し  
 宜と音りくく 釵と流る  
 八十年を三川くを 童舟りて  
 ろうららちきむる七女のつま  
 つゆあに桂のそまのつゆとく  
 蘭のあめくくトホくう音

まま  
 荷子  
 杜国  
 芭蕉  
 羽笠  
 荷子  
 ちよ  
 杜国  
 羽笠  
 芭蕉

砂のあかりに照らさるる女をくうする  
幼穉は粟ををわくく日の子れ  
もやうにまきく接ふくう山月よ  
ほぐらるるま向る矢まよのこま  
寅の日の具を船後のまを記く  
やううりりき 南条の地  
いづきしき作ともあぬ人の像  
派しとくろのまきよき片の根  
葉すくもあうくまをたふうくあう  
移る夜のしらに 後ふまき風  
かのうくこたうく 必意のまうく  
移しきぬまをき責るしうく

重五 荷子 杜国 中水 芭蕉 相堂 荷子 重五 中水 芭蕉 相堂 荷子 重五 杜国

田家眺望

雲月や 鶯のイくまうひあき  
まの朝日のあられまうまう  
櫻松山あまの侍をまのまあ後  
ひまひとせうく の地をわれつ  
ま目もあき 日ままのうまいと  
酌とく 童 葉切り いろく  
秋のくま 旅の比連效のとうり  
海 まねく 富士まのう 寺  
岸とくく 枝の花のまうる音  
葉とく 葉 遊 後う びる 月の香

荷子 芭蕉 相堂 荷子 重五 中水 芭蕉 相堂 荷子 重五 杜国



ふみ干しを香りの空りのわたり  
山を素の空の白くみまのとうり

世の  
相違

追加

りつたことと新画うらまの  
栞のよあつらうまのうの松  
とくさ新下をうまをうま  
松のまにまをうまのま  
銀のうらつらん月ま海  
ひらうに栞をすうに波阜山

荷分  
重五  
杜国  
芭蕉  
焚水

羽生

ひさこ

江東の珠碩あつひさこを送ねりてねは是れあぬ水を  
のりて海を多しあひあまあつた或は大杉ふ造りて  
江流をりつれりしるふくあまも異なり其まは流の  
恵子ふしと用ると知しらにつらくそのやう  
小騒しのをまうりてはうらふ瑞る碑とくはる十月月  
陽秋まきりくうらうと雪のあけりの園の郭も  
うきうらうとあくあを昔知人ともんてきうらひ皆  
風程の深思をいふとあつた是れあつたのさう  
ゆゑ乾坤もあつたをわくそのことをきく毎日  
此内よをわく入

元禄三六月

越智

越人

花見

あのゆきよけも鶯も桜も那  
西日のとらうりよき天を乳なり  
旅人の風うきりまらさるく  
くまもあつたねち力の鞆  
月待く候の内裏の司石  
初白つらうら 杉うらやうら  
鞍あつた三葉物ふ秋のあつ  
名あつたうら 降つた雨  
入つた流石の涌湯の文もあつ  
中つたせりのうら 山伏  
珠碩 曲水 翁 水 碩 翁 水 碩 翁

翁



のみくまを時一方えきり  
 ぬきき第より 意はのつて  
 おたのしみありの言と甘うね  
 月をる 報の 往來のき 霧  
 風の色をとるる 波の音  
 舟ゆくうさや 白子 松  
 の部 読書の 聲うのり 田  
 巡れぬぬる 風の うきうき  
 何よりも 時の 況を あそぶ  
 又出るとの カキ たり  
 羅 一目をいととる けから  
 然也 みくまや 流るいなり

碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁

手来り紀の 冥さる 頌  
 酒をけける のりぬらん  
 双六の 目さのそくまをきく  
 何の 持件に ひりみ 念仏  
 舟く 又去問は 右に 登る  
 遠なる 里の なりり のあり  
 此の 是なりぬ 鐘の 音を  
 月 ぬきき 月  
 花の 香の まる ねけを 花を  
 唯四方 なる 草の 音の  
 一貴の 砂むらう 土の  
 三貴の 土の 音の ぬか

碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁

花咲くまにさき地あつをた廻  
水 碩

公羽十二 琢碩十二 曲水十二

琢碩

のうくのちをむつうやまの景  
翁

幅のともあふつうまう望  
全 通

は東と蘇のまをうまはふまを  
碩

秋のち官ものそをせむひ  
全 通

とをくまをふくまを  
全

うつり 鳥のぬ織をうまの  
碩

小六うつり 市のう  
全 通

鏡沼のちのまをうまの  
全 通

念伴のちのまをうまの  
全 碩

とくらのまをうまの  
全 碩

産のまをうまの  
全 通

夫のまをうまの  
全 碩

生網のまをうまの  
全 碩

は村のまをうまの  
全 碩

みらうらんをうまの  
全 碩



其のまゝのひ二人あつたけりるる  
秋のあまの物さうのま  
女帯花を細き糸にたそそめ  
月の中へたそそく足さうの  
あま又川原へをよるま  
のたうま まつた  
るる石神をたそそく  
一里とて山の下新  
をたそそくあまのま  
あつたせうのあま  
雪舟へあまのま  
まあまのつあく丁百の後

怒誰 珍碩 筆下 野徑 里東 泥土 乙州 怒誰 泥土 里東 野徑 乙州

月花をたそそくあまのま  
あつたせうのあま  
雪舟へあまのま  
まあまのつあく丁百の後

乙州 怒誰 泥土 野徑 里東 泥土 乙州 怒誰 泥土 野徑 里東 乙州

粉削きおまらちのたに在りて  
 又巴の嶺に茶舎喫ゆを  
 肴経の嶽にまきうき暖る  
 四十きき老のうらきき際  
 葉くせえ松の路を掃ゆり  
 研を細きうあけと吹ゆ  
 杉村の若六の葉を雨ふり  
 田の片隅へ苗のとりき  
 野徑 六 里東 六 泥土 六  
 乙州 六 怒誰 六 珍碩 九  
 筆 一

雜

龜の甲まきうら、樹ハ啼もまに  
 峰斗葦葉の風のふく 言  
 百姓の本糸はまき六のまき  
 小矛をうらゆらうらうら  
 宿屋まきうらうら間のひらき  
 嶺嶺まきうらまきうら  
 秋の葉のまきうらまきうら  
 風呂の加減のまきうら  
 葉のまきうらまきうら  
 葉のまきうらまきうら  
 初らう離の中を掃ゆり

乙卯

珍碩 里東 探志 昌房 正秀 及肩 世任 二嘯 乙卯 珍碩

心乃 七とくまきそあつらん  
 内 老乃乃まにほそこの 探志  
 探志 新く 呼ぶ多幸  
 探入のけさりく 月より  
 ちこ 上京もこのやくさじ  
 蓋ふ 登る 多相の町 今年  
 雀さ 春よ 筆のぢく 巻き  
 うま 舞う 目さ みる 雲の  
 神 のひさし ぬまの 出らぬ  
 漆く うき本 探志の おき  
 探 あまき ねく まさし わけり  
 眠 うるに 探志の 中さ 一

里東  
 探志  
 昌房  
 正秀  
 及肩  
 聖徑  
 二肅  
 乙州  
 琢碩  
 里東  
 探志  
 昌房

七

神 ころき 呼ぶ まきらんり  
 いま ころき まきらんり 探志  
 あり 汲う ぬま 探志の 杖  
 さくくと 切探志の まき 風吹て  
 まさか 乃 探志の 杖の 月  
 吟 物ま 探志の つく 探志  
 探 探 探 探 探 探 探 探  
 月を ぬく 探志の うま 探志  
 とひ ころき うま 探志  
 まき 探志 探志 探志  
 探志 探志 探志 探志  
 探志 探志 探志 探志

正秀  
 及肩  
 野徑  
 二肅  
 乙州  
 琢碩  
 里東  
 探志  
 昌房  
 正秀  
 及肩  
 聖徑

さうとて、野入獅子のまき尾 二崎

乙州 四 珍碩 全 里東 全

探志 全 昌房 全 正秀 全

及肩 全 野徑 全 二嘯 全

田野

野道や苗代時の角去師 正秀

あまの さまあじゆの類 珍碩

は角らとのりやうまの字、 全

うまの字 ねりしき 門口の文字 秀

月影の利休のあまを異ふ類 全

度く 芋をよむらうらうら 碩

出を皆つゝれくとゆめしむ 秀

序はくの本後らりぬる 碩

拙文を百もあてるとあはれぬ 秀

かゝるゝゝゝゝ 侍 碩

頂上ハまゝと物を自はする 秀

狐のあゝる 碩

是れは 野道のまきの類 秀

多知まみしつゝる 後も 進守 碩

のゝゝゝゝ大振持もあはれと 秀

物あゝるゝゝも 競競ゝゝ 秀

江戸海をたぬるゝゝゝゝ 秀

あゝの 山嶺 まゝり 入 全

雲の在情一里八 庭果集の巻末に  
 中を吹くみゆる 後門の親父  
 本堂のままに 若菜のうらら垣  
 庭の縁の杖 ちあをまぬぬ  
 雲を痛人の 雲を修すまぬ  
 為の考くまむ すすき無さう  
 庭垣の定ふふ 糸幅を挿るま  
 日と星ぬらふ さまの財宝  
 多ふのけふ 山判うまぬ  
 秋入初る 能後の 隈木  
 紫白路を 竹まき 庭を  
 寸布子ひらり ねんねん

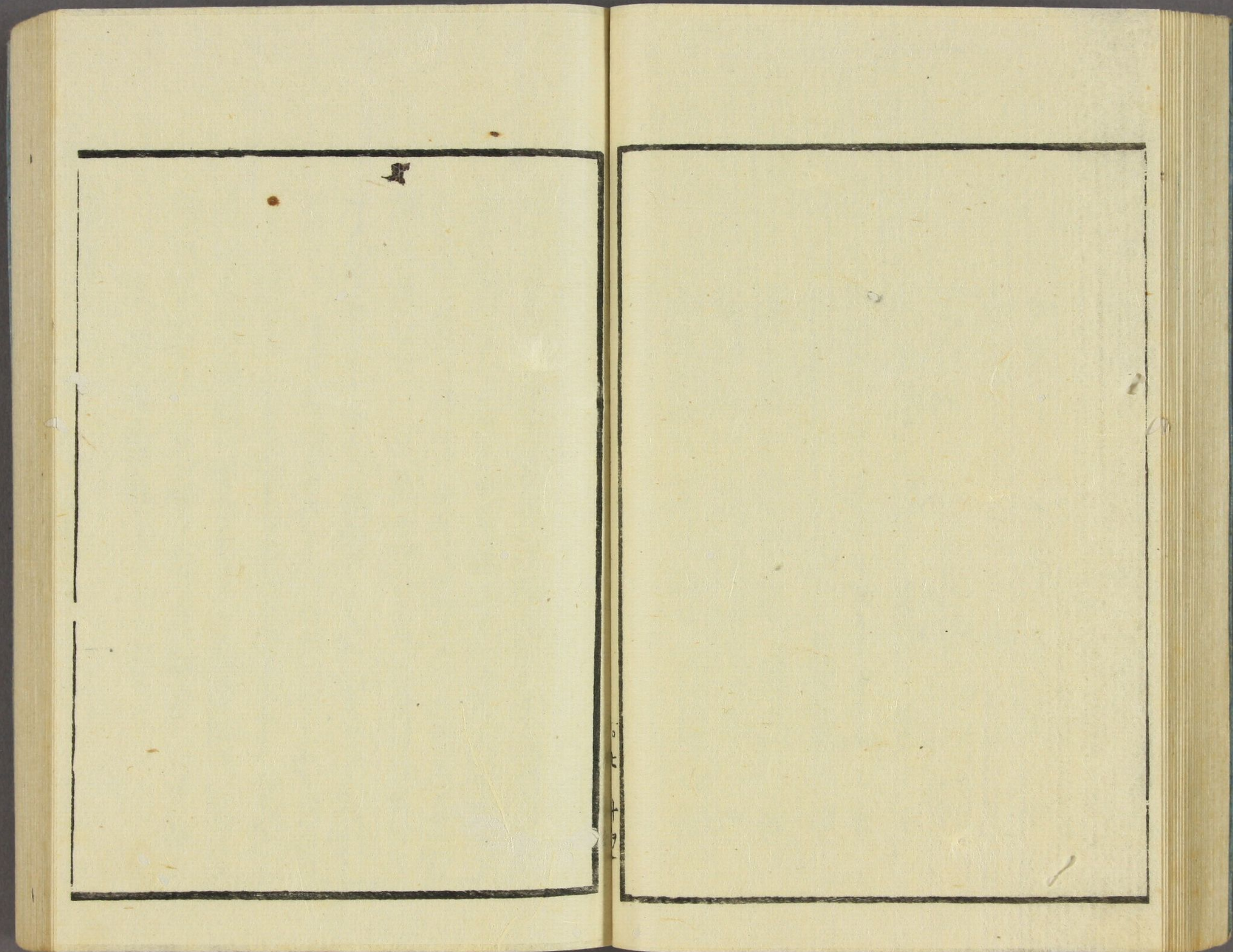
秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破

沢山一 元やくと 吃らまぬ  
 晴あをけとも 猶ふゆり  
 庭の親父 小人町の 雨あがり  
 庭の縁の杖 ちあをまぬぬ  
 雲を痛人の 雲を修すまぬ  
 為の考くまむ すすき無さう  
 庭垣の定ふふ 糸幅を挿るま  
 日と星ぬらふ さまの財宝  
 多ふのけふ 山判うまぬ  
 秋入初る 能後の 隈木  
 紫白路を 竹まき 庭を  
 寸布子ひらり ねんねん

秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破

正秀 十九 珠頂 十七





猿蓑

晋其角序

猿蓑の集つてゐる友よりうらやまのあつた記を  
きつて聞かぬや幻術の事とてその面白く魂の入れゆも  
よゆもつてふれつてく——久しく世よりまうとてくま  
りつてくもつての事あるにむすむ徳のいふる事つたを  
つたてふ事——あるあり 猿蓑よりよ人の骨あつて人を作つ  
たてく 髪いふにわつて 笛を吹かすにうたへんはつてくま  
なる人へん 顔もつたれともあつたの事いふにうたへんはつた  
法のとらふとらふはつたやまされた事——あつた入つたふアイ  
ウエラうくひもつていふにうたへんはつたも 脚あつて——只  
猿蓑の魂の入りつて舞ふとてとてくまをね 初脚のつら

伊智の哉——山中に猿蓑と山蓑をいふて 猿蓑の  
非を入るまひつたれとたらまら 断脚のたりの目ひ舞  
あつて 懼ろくは幻術あり これをえとて 此集をとり  
つて 猿蓑といふは 昔中きつたる 是は 序もこれいふとら  
魂をいふてくまをいふ 非のり——けあつてくまをいふて書

ま

初——これ猿蓑も山蓑をいふて 芭蕉  
あつていふてけや 時 雨あつて 猿蓑の序  
時あつてきや 并ひいふてつる 妙ふね  
幾人——これいふてけや 時 雨あつて 猿蓑の序  
猿蓑の序 括くつる——これいふ  
芭蕉 其角 十那 大中 正秀

唐の海やひくく時をく記をさる  
舟人よぬこの海をさるの時を記  
史邦 尚白

舟加人の境よ入る

かろくくやまをさるの境の一財を  
羽北

財あるやまをさつむやの境あり  
乙州

るうりくく竹田の甲やちししれ  
羽紅

まをさるかーはるのまをさる財を  
昌房

新田の釋穀畑をーくまをさ  
去来

いそくや沖の財をさる航に航  
百歳

まをさるまをさるや北岸のまをさる  
野水

一のまをさるまをさるおまをさるまをさるま  
野水

海をめぐ

まをさるまをさるまをさるまをさるまをさる  
全

帰る花よりれまをさるまをさるまをさる  
凡北

釋の寺のまをさるまをさるまをさる  
炭蘭

百千石をさるのまをさるまをさるまをさる  
芭蕉

ころくくや類種を痛む人の歌  
凡北

妙くけや築のころくくまをさるまをさる  
凡北

かろくくめを

旗の旗のまをさるまをさるまをさる  
土芳

海をさるまをさるまをさるまをさる  
据道

ちやのまをさるまをさるまをさるまをさる  
越人

まをさるまをさるまをさるまをさる  
猿轡

古寺のまをさるまをさるまをさるまをさる  
凡北

公孫の堅田の字を記す

雑炊のあつちろかきくみまのり  
このまきまき牡丹のちみまのり

斗角  
車来イカ

草津

海日もまらうそこのり  
津平水たきまらうる津

尚白  
珠碩

平賀月相旦

藤まらうの節まおろし  
まらう月の水ま種まらう  
今ハまきまのむらまらう  
屋敷のころのまらう  
一徳くまらまらう

良品イカ  
不玉尾法  
且菜尾法  
去来イカ  
探丸イカ

みらりまらうのまらうのまらう  
糸陽まらうつらまらう

尚白イカ  
龜翁

岩屋電まらうの節の倒れ  
行つらぬ旅のころやまらう

凡北  
芭蕉

三徳まらうのまらうのまらう  
門前の小窓まらうのまらう

其角  
凡北尾法

本名まらうの切らるるまらう  
まらうの暇まらう

玳瑁イカ  
半残イカ

公貞の吏

まらうの紙まらうの切らるる  
浦風やまらうのまらう  
あつちろまらうのまらう

大中  
曾良  
去来

松のあしと海はくさや 淡ふさる  
春門はの 入江よのある 千々  
の川とる 西よまのねを海千々  
夫田の舟や 浦のあなねを鳴さる  
茂木の 元々くさる 海や船の舟  
あなねを 元々くまの 舟の舟  
あなねを 舟入くある 舟の舟  
元々く 探取く 舟の舟  
海千々 元々く 舟の舟  
この 舟や 舟の舟 舟の舟  
かくありの 舟の舟 舟の舟  
元々く 元々く 舟の舟 舟の舟

史邦  
大中  
千那  
凡北  
木宮  
丈ヶ  
路通  
具東  
杉凡  
其角  
暮年  
智月

首の 舟の舟 舟の舟 舟の舟  
題竹戸之象

竹戸

舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟

舟の舟  
舟の舟  
舟の舟  
舟の舟

舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟

史邦  
野童  
禾峰  
凡北  
畫好



弱法師 森門 中々 せ 殿のれ  
嵐の 彦や 名 根を 寄の 小も 枕  
うす 翠子の つまみ 入 何うと ぬの 名  
く 翠子の 羊の まま け 修治 金ま  
た しく やまの まう ねる 人 しく  
中 しく ねる 又 やま 山 しく まの 寄  
ゆ ねく しく 人 しく まね しく 寄  
まの くれ 破 しく 袴の 寄 しく

其角 長和 玄来 全 羽紅 牛角 踏通 杉風

夏

まの みの 面 お しく や ね しく  
ま しく しく 黒 しく しく 寄 しく 寄 しく

玄角 水葺

世を 横よ しく 引 ね しく しく しく  
時 しく しく しく しく しく しく  
あ しく しく しく しく しく しく  
ひ しく しく しく しく しく しく  
蜀 繭 しく しく しく しく しく しく  
入 おの しく しく しく しく しく しく  
け しく しく しく しく しく しく  
ら しく しく 代 しく しく しく しく  
こ しく しく しく しく しく しく  
お 務 一 男 の 時 しく しく しく しく  
ま しく しく しく しく しく しく  
お 務 一 男 の 時 しく しく しく しく

芭蕉 尚白 元兆 智月 史邦 羽紅 大妻 去来 奥州 若丸

うきよの如き山一うきよの如き

芭蕉

旅館を尋ねて夜を過ぎる

もろ相葉のうらみはハ一さうぞ

曲水

四月八日 指多每墓

花のうらみはうらみはうらみは

美あつくりぬ花を牡丹の冷め分

全峯

別傳

らうきよの心をもよおし米囊花

越人

知事あつくりぬ人をもよおし

西京

海に付らぬすまのうらみはうらみ

支

似合一きけりの一きけりの里

杜田

まごころたれ白のもゆりうらみの

嵐蘭

七

井のすまのうらみはうらみは

半残

起ぬく物にまよおしぬ

仙化

起くのうらみはうらみは

題を来しうらみはうらみは

豆柿の細もゆらぎも

元兆

被りやうらみはうらみは

岩倉

南都旅店

程のそくたうらみの

千那

洗滌やまよおしうらみは

尾傳

世に國を

竹の子の力を程ふも

元兆

多けの子や自由

玄末



たけのこや 稚き時の 後の子まゝ  
猪ノ吹之さうくさりー うれ 正秀

明不夜泊

増き帯や そろりまゝの月  
まろ 代や 流し舞も 踊つて 裁人

八月三日の月一せむ家よて

ふねはるこ 並くわける 昔の浦外 其角

穉結入 ころもにまゝ 額縁 芭蕉

隈の 産まふらりー 解標 江戸 岩翁

さひー さふはる人 やらまうら 尚白

九月六日大坂からぬのきき伝舟ひて

大坂やとぬよの 夢のぬき 傳吟

真如きう鐘めく

夏草や 兵せり ゆえの 露 芭蕉

送ゆよりの ぬらりの 鱗の 変 日

は境をひさる ちりー ちりーの ちりー

うー ころと 角さりの けよ 次大 日

みー ぬらりー ぬらりー 推し ぬらりー 日兆

部ねまの 味さの ちりー やらりー ぬらりー 木暮

るとの 細い ぬらりー ちりー 史邦

美濃の 都ふりー ぬらりー ぬらりー

ちりー ぬらりー ぬらりー ぬらりー

ぬらりー ぬらりー ぬらりー ぬらりー

ぬらりー ぬらりー ぬらりー ぬらりー

大和紀伊のさつひをそなう

大和紀伊のさつひをそなう 坂上野守の

の巻をよみしるはのさつひをそなう

料をよみしるはのさつひをそなう

つらつらとそなう 一 坂上野守の

坂上野守のさつひをそなう

目のさつひをそなう

後おやのさつひをそなう

七十余の巻をよみしるはのさつひをそなう

つらつらとそなう

ひつそこの巻をよみしるはのさつひをそなう

おまへにそなう

おまへにそなう

おまへにそなう

おまへにそなう 其角

おまへにそなう 去来

おまへにそなう 正秀

おまへにそなう 遊力

おまへにそなう

おまへにそなう 智月

おまへにそなう 花紅

おまへにそなう

おまへにそなう 芭蕉

お母のきりぎりす

肩舞を酒の酔うし〜お母の糸 全

はなはなと〜お母の糸

はなはなのこころ〜お母の糸 千那

田の畝のま〜お母の糸 万平

懐は曲る〜お母の糸

雲中や吹〜お母の糸 去来

野田乃〜お母の糸

雲の夜中〜お母の糸 元兆

あ〜お母の糸 芭蕉

三念母〜お母の糸

雲中や〜お母の糸 長井 田上尼

あま〜お母の糸 尚白  
草ゆ〜お母の糸 雪残

病後

さ〜お母の糸 大友 何処

す〜お母の糸 乙西

懐は曲る〜お母の糸

さ〜お母の糸 嵐葉

別

さ〜お母の糸 榎本 里泉

さ〜お母の糸

さ〜お母の糸 其角

さ〜お母の糸



唇よりきつくと、  
月鉾や、  
夕つわや、  
さしゆき、  
千那  
夕良  
去来

雪のまね今の、  
大坂  
之道

妹

秋風や、  
不  
人

此の東まはよりきつとありー

かたつらと、  
杉風

昔ききあふ、  
路通

人よ、  
強頑

加賀の全昌寺に在り

終る夜秋風きつくと、  
山  
山川  
凡兆  
去来  
野童  
凡兆  
芭蕉  
全  
杜若  
去来  
風雲  
及肩

笑うも泣くも世なる 木種うれ  
 手をおもくおしくとちり木種介  
 多物心算ひるくおき 千那  
 こそくぬく涙のさるまや 史邦  
 そよくや 萩の肉より 具兼  
 秋風やととも 子尹  
 迷ひあふの 羽紅  
 八咫鳥くま 紫うの  
 虫けらと 平田  
 まねきく 楊の 九兆  
 つろしより 九兆  
 山をそ 九兆

○廿十三

笑うても泣くも世なる 木種うれ  
 草刈ふそれらとちり 李由  
 えんげと身は 李由  
 より三越 李由  
 かくのふとそり 李由  
 春うらとととと  
 いつこもたふれ 李由  
 柳のふとととと 李由  
 百ととととと 李由  
 初尾ととととと 李由  
 柴田ととととと  
 病ととととと

海上のふらふら海船のまじりゆくか 全

おぼろの山をこきまふ美田の神社の

宝物くくく美田の神社の

うきと目くく海の切あうままの

なうくまのめくく懐くあむま

おぼろや丸甲の下のまろくくは 芭蕉

草由田や二葉のの中の虫のま 尚白

まこおのや種くままの宿のま 凡麦

りきくまうてくく

まき月や交ねくまのま 七人 千子

三月月く養のあくまをくく 之道

葉本神と目如くまのま 半銭

月身くまの 依くまの 疎乃 捨 鄭 玄来

海をまきまのま

たのくくく 松のまのま 土芳

加茂くく 後のか

かくくの神

月影や拍まのく 鑑の上 史邦

ままのま

影くく たるくまのま 卓袋

ままのま 赤くく 月影の 乙加

ままのま 年の月く 夫中

風のおま 月ひく 凡兆

ふるく ねてく ぬ月の 尚白

向の終き 夜も月をうらみ 繁るれ 芳良

を羅三幸つる月の傍に月をうらむ  
先はの思弁は終に上人の古例に

月清し 雲ののりて 砂の上 芭蕉

付秋の心を移すを云はれ

うらむ月の月も 雲のうらむ 去来

明月や 雲の月の 雲のうらむ 昌彦

月をうらむ 人の 雲のうらむ 尚白

後山のもの 雲のうらむ 尚白

初夜や 雲の月の 雲のうらむ 元兆

一戸や 雲の月の 雲のうらむ 去来

稗の植のうらむ 雲のうらむ 裁人

法猶 やうくはも 吟のうらむ 正秀

あやうくはも 吟のうらむ 炭策

一考 不吟の山更遊

物の言ひひらりたうく 雲のうらむ 元兆

望く 雲のうらむ 雲のうらむ 芳良

旅枕 雲のうらむ 雲のうらむ 千里

誇り 雲のうらむ 雲のうらむ 珍碩

上り 雲のうらむ 雲のうらむ 元兆

誇り 雲のうらむ 雲のうらむ 半踐

あやうくはも 雲のうらむ 雲のうらむ 尚白

雲を 雲のうらむ 雲のうらむ 其角

雲を 雲のうらむ 雲のうらむ 珍碩



この秋のむらさきと秋の秋  
縮くくく 舞ふ山はふくまふ山  
土芳 凡北

自題 信務舎

枳やも 指さらくきわく山  
去来 塵生  
如品小松  
凡北

祚田 家

まねくともひらの指さのやうな  
祚田 家の 鞆の川  
整定  
指さのやうな

花すくさ 大なる花とまうり  
凡雪 夫抄  
り秋のにみ白弱くすくまふ

まねく 秋のふや風わらう  
凡北  
世のゆく 勢の尾のひまは  
全  
陰雲の 出まをさうのや指のさ  
椅兮

春

梅 咲く人の愁の 悔もあま  
露沾

上篇の山はまきくくふ候一ちて

梅 香や山路 獵合ふまのま  
去来  
ひらく 香やふ入甲六斗の角  
如賀 句空

庭 真

梅 香や砂利 へき流は谷の夾  
土芳  
まら 露や雪のまき 月も梅の香  
半残  
梅 香や酒のくまのあふとま  
蛭嵐

ひたしの事やけ一筋をささのたう

其角

さ長鼓のたふし梅のこころ

流るるにのこころ一とて梅の木の

芭蕉

癒をたやけつらふれのたの梅

千那

灰たたく白梅うら心恨屋敷

後  
元北

日當りの梅咲らうや膚牛房

支那

晴香浮動月黄昏

入相の梅ふさうはひのこころ

風雲

成空をのびて娘達の泣き声

痛くくしき寒の細目や園の梅

乙女

平床のくしき寒のこころあつたうら

少くもそ梅のたふし梅のこころ

回を山嵐さうらぬうらな梅のこころ

葉肉若しのこころを思ふうらな梅のこころ

やうにちのひはれたまおしなれと感動

身は志まじう涙もやにほらうらな

そのおのさうし平くまうらなと梅

うらな六七八のこころ風雅を

はなうらや

ささの山で又一白の青の梅

嵐兼

百八のうねと迷ひや雪乃らむ

全角

ひくろし梅も終るうらな初ふ日

玄未

世も梅や房の追のけく梅のさ

史邦

その布や雪ふ漕きあうらな梅

嵐兼

宵乃月 海ふまのまのまのま

如竹

憶公爾元客中

裾おくくきまをつてきんきんきん

嵐雪

つとすそく 踏方くさきさききん

路通

七種や 越えううううう ねううう

其角

とあつと 綴のゆけー 振芥介

丈艸

ううくもや 口川ふんぼる 芥うま

生角

綴と六 夢のううううう 有あ介

全

海くさきとぬううううう 綴う

去未

常はききき 後うす 垣積うれ

伊賀一桐

ききやうもや 一ききのあううう 介

其角

ううううう さま後ううううう 介

ききや ちききのあうううう 中田のち

九兆 泉日

あゆのきき 柳ううううう 介

探丸

けき痛ハ うううのちうき 柳うれ

下宅

垣くさきとぬううううう 柳介

遠水

とくさ川 柳うれきき 柳うれ

尚白

青柳のあううう 柳の介

一吹

あううう 捨りうれ 塙のすき

木白

侍中の二甲片もさううう 月

揚水

田舎あふさき

まきあううう 川うううう 橋のあ

芭蕉

ううううう ちきき切付 橋のあ

越人

うきあめがまはれく指のさきも

無言はくくく餘言の當位

去来

まき風よぬきまよとらぬぬ羽織が

魚翁

野のまきらちりくく下まき三二月か

尚白

ゆくりや櫃のわまなるこまの母

亀翁

ゆき雪や知ららるる物あそれ

炭雪

宵はゆのくくれまきまあのみまか

凡北

白くまや海はまかた部のうのまを

冬南

人のまはらぬわき後や揺海苔

松峯

まき風よくくゆきまきまきまき

元志

陽まきやまきまきまきまきの上

荷今

くはまきまきまきまきまきまき

百歳

うけりうのせりうくまきまきまき

出芳

ゆきゆきのゆきゆきのゆき

水同

ゆきまきまきまきまきまき

凡兆

うけりうのせりうくまきまきまき

苦楚

ゆきゆきのゆきゆきのゆき

配力

狗脊の産まきまきまきまき

炭室

彼まきまきまきまきまき

崎通

まきゆきまきまきまきまき

世水

まきまきまきまきまきまき

凡北

まきまきまきまきまきまき

炭虎

まきまきまきまきまきまき

炭虎

まきまきまきまきまきまき

炭虎

まきまきまきまきまきまき

炭虎

まきまきまきまきまきまき

炭虎

まきまきまきまきまきまき

炭虎

まきまきまきまきまきまき

炭虎

さう由や山より出るやしの門 猿蛭  
るけりせうき起るなりまの面 芭蕉  
まの由や田葉のしよの織る雲 史邦  
らうまののめりやねらふく蒼 羽紅  
泥亀や苗代まの睡つこい 史邦  
城まのつるまの井の竹や虫よ雲 昌房  
旅まのやちりまのまのまのまの雛 玄来  
まの風まのらまのれ雛のまのまの元 秋子  
柳柳らまのめりまのまのまのまの子 羽紅  
まのの糸まのまのまのまのまのまの子 山嵐  
里人の換まのまのまのまのまのまの子 炭雅  
蝶のまのまのまのまのまのまのまの子 半残

糸帯切く白根の山嵐をりよ介 カキ  
りのりまのこまのまのまのまのまの子 イカ 園風  
日の光やまのまのまのまのまのまの子 瑞石  
考熱まのまのまのまのまのまのまの子 土芳  
周のまのまのまのまのまのまのまの子 芭蕉  
裁まのまのまのまのまのまのまの子  
のまのまのまのまのまのまのまの子  
のまのまのまのまのまのまのまの子  
蜂のまのまのまのまのまのまの子 カ 丸那  
うまのまのまのまのまのまのまの子 カ 石口  
まのまのまのまのまのまのまの子 杉風  
ひまのまのまのまのまのまのまの子 芭蕉

芭蕉のたのむるまじき

芭蕉 二 鶴は 一 あるぞこれ  
曲水  
山店

書讀

山吹やうほの嬉ゆの白人時  
芭蕉  
車来

りつりよそくやまひらあつた  
蟹けつらんもあひつらんしげま

うめをえん

竿もくしも 廿日やちり 桂  
羽紅

鳩牛 赤うめせつる つらまうか  
桂上氏  
芭蕉

たのまうしよし 進みよさひんう  
利野

東叡山ふのそま

小坊らや 赤うめしよし 山吹  
其角

一枝のあつたぬもころり 山吹  
尚白

鶴のたのむまじき 中  
凡兆

まのいよえん 一枝のあつたぬ  
大中

まのいよえん 一枝のあつたぬ  
史邦

まのいよえん 一枝のあつたぬ  
千那

芭蕉のたのむまじき

たのむまじき 赤うめしよし 山吹  
まを

のひまき梅の科は附られたるとき傳人

いんるつれを

一里ハミル後ちの子孫もや 日

亡父の墓と武公の墓にまじりて  
中をふれ廿二年の後の地よりぬ  
墓のまゝ様樹を定むるよしうなく  
母のおもひつゝみその樹をうね  
傍らの他の墓はゆるらぬ

まろつやのたぬ入地のは遠り 園風

知人よあつしくと花らんか 吉朱

あつ信の婿ひ一あのかくれ 元兆

浪人の中へゆく

嵐代まゝの夜あれそと花観 半歳

脛まにたれらる中一のゆめか 長眉

それも契をとせしはよほり

大おのやよりけり妻のあのみ 多呂

乃瀧ふよのある

乃瀧やつたハその代せは風介 嵐葉

源氏の後まゝん

様千よ夜あるあのみまゆら 羽紅

庚午の歳家を建てる

様まろりけりまじりてあつちりすは 北枝

それあつちりてあつちりすは 元兆

海棠のそれハ満ちる夜の月 多呂

大あちり御のよ

草師とありて 此や若の松  
少きや 蹴踏よけち尾のひねり  
中より、一浦よふとや夕日影  
を角一と弁花つむむ 海舟系  
響の響又きくそめくより 山路系

ホる塚

其のまゝの石とよたつて本巻の言  
まの 初めたれう初康の巻巻  
予は水情

わがまゝのいふのくゝかゝるゝ

きたれ相も 刷ぬまのりーく

土未

芭蕉

探丸

智月

山川

式之

乙居

為良

芭蕉

一子き 風の木の葉あつた  
後川の船うらぬる川を  
たぬきをむとて 後降の  
まのくさよき 遠うるまの月  
人よよふとて 名物の梨  
かきよのうらまは 妹を  
をまのうらまは 妹を  
何のもまのうらまは 妹を  
里のうらまは 妹を  
をのうらまは 妹を  
まのうらまは 妹を  
あつた

芭蕉

元北

史邦

蕉

来

北

邦

来

北

邦

蕉





市中人おのふりのやまの月  
のけしと門くのけり  
二番のまゝの馬の種よく  
てうらうらうくうまゆ一枝  
はあか沼もよくては自由堂  
たくとりやうしよ馬の種よく  
草村の地をうらうらうまくれ  
藤のまきとらうらう地の中  
道のわのわとらうらうのつむむ  
能登のせとらうらうのつむむ

芭蕉 来兆 芭蕉 来兆 芭蕉 来兆 芭蕉 来兆

魚の目ありて道のわのつむむ  
待人入し小待門の後  
まうらうて候風を倒し女子  
湯のわのわのまきとらうらう  
苗香のまきを吹くは久嵐  
後やうまむくまふく入る  
さうらうの種と世をけるはの月  
年一に一年の地をうらうらう  
めち本生まつけらる名  
は代をうらうらうのつむむ  
進くうらうまきとらうらう  
てのわのわのまきとらうらう

芭蕉 来兆 芭蕉 来兆 芭蕉 来兆 芭蕉 来兆

戸障ふもひしつらふのまゝなま  
 とんどまうまのつらうましく  
 こましくとをむをゆる月夜に  
 登るをふらひは紙し 初秋  
 そのまうふとらひをくさる外屋  
 由らして 蓋のあふぬま 桂  
 草をふらむくまふらふやあり  
 りのら舞しき 舞集のうさこ  
 さまうしよふらうらうらうとて  
 深雪の果へ 皆 少町より  
 みるあふ舞するま 深く  
 清いあふとかなれ六度き 板表

蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆

子のひくふ乱るるすのうけ  
 うさこことうぬ 屋の 移りこま  
 九兆十二 芭蕉十二 去来十二

蕉 来

灰汁桶のま下をうらうまうら  
 わらうらうらうらうらうらうら  
 新をきまらうらうらうらうら  
 ろうらうらうらうらうらうら  
 五代孫へき物を伝へる甲子  
 雪のふらふたひしうらうら  
 うらうらうらうらうらうら  
 摩訶那うらうらうらうらうら

蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆

中つりふらまはと 管六風葉  
腔のにまのさくまはく 気時よま  
ものおのひらうの 息ねを 体む目よ  
途せうく さいく 後よりけりうくま  
金得とくふよらうく 舟の舟まき  
あけ 風鳥すまの 舟くの舟  
町内の 秋もあけ 明やーま  
何をこころふも ちかすうりこ  
花とららる 舟の 面会う 衣をて  
亦るの 船 若ふまも くれつ  
のくまやう 山陰 舟はすう  
紫あさけ 舟の 舟ねを うくま

北 菘 来 水 北 菘 来 水 北 菘 来 水 北 菘

あつそのあまはく 成るあけ 舟  
様の 飛まきよ 有ぬー せく  
すうまー さい女の 智あまはく  
何あまの 舟 船の かつく  
夕月 秋鳥の 舟の 舟まき  
人もすれー あつそまのあ  
うそつまふ 舟の 舟まき  
又もすまの 舟を 舟まき  
堤より 田の ままはく 舟まき  
か茂の やーらう 舟まき 舟まき  
おまの 舟まき 舟まき 舟まき  
るの中らうの 舟まき 舟まき

北 菘 来 水 北 菘 来 水 北 菘 来 水 北 菘

三層のつらき登りの名のたかきよ  
 志とつらくくはるは蘭のそよとらん  
 高橋 後つらとらん ぼよとらん  
 ぼよとらん 三日月 曙の そとら  
 元兆九 芭蕉九 野水九  
 去来九

芭蕉 北 来 水

餞と品東武行

梅のら女まきくらの者のまき汁  
 うさこのつらくくはるは蘭のそよとらん  
 高橋 後つらとらん ぼよとらん  
 ぼよとらん 三日月 曙の そとら

芭蕉 乙 品 除 碩 来 男

片の湯へ出 出さうとまきとまき  
 二階のまきくくはるは蘭のそよとらん  
 梅のら女まきくらの者のまき汁  
 うさこのつらくくはるは蘭のそよとらん  
 高橋 後つらとらん ぼよとらん  
 ぼよとらん 三日月 曙の そとら

品 芭 碩 男 品 除 碩 来 男









せめる人をもく顔をもひとせらりくとちきをさし高く  
 幻燈花の二字を送りて、新く草菴の紀を分ぬ  
 すんく此居といひの端を境とせざる器もめりて入てくも  
 きし一其方の松を蓋の女を著斗松の上の松を  
 ぬきつる、六條くしとあつぬ人々を動かすは、  
 まそのの箱甲の札のとせ入ありて、このあつぬ箱ひ  
 あつて、その箱ひを動かすつとあつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 日沈みし山の松の影、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 影をばひ、影をばひ、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 影をばひ、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 きふ、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 人々、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、

あり、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 一、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 され、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 け、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 し、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 者、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 り、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、  
 え、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、

題芭蕉翁國分山幻住菴記之後  
 何世毎隱士以心隱為賢也何處每山  
 川風景因人羨也間續芭蕉翁幻住菴

記乃識其賢且知山川得其人而益羨  
矣可謂人與山川共相得焉廼作鄙章  
一篇篇歌之曰

琴湖南兮國分嶺 古松鬱兮綠陰清  
茅屋竹椽終數間 內有仕人獨養生  
滿口錦繡輝山川 風景依稀入緋城  
此地自古富勝覽 今日因君尚益榮

元祿庚午仲秋日 震軒具艸

几右日記

晴多資中ノミクハシ林麓 曲水  
之川ノミクハシノ 野水

窮もくくく 附くもく窮もく  
海山にみくく 海とくや一くく  
水くくき 岩をみくく 猿のく  
細粒乃 金くく 水くく 水くく

幾右日記

あひくく 沢 峰くく けと送くく  
あひくく 沢 峰くく けと送くく  
あひくく 沢 峰くく けと送くく  
あひくく 沢 峰くく けと送くく  
あひくく 沢 峰くく けと送くく  
あひくく 沢 峰くく けと送くく  
あひくく 沢 峰くく けと送くく  
あひくく 沢 峰くく けと送くく  
あひくく 沢 峰くく けと送くく  
あひくく 沢 峰くく けと送くく

全来 几兆 千那 珍碩 丹徒 里東 乙及 怒羅 探志 先志 泥土

笠ののり押すくしや風の交  
史邦  
明花や油を尻目ふ夕すく夕  
正秀  
あつこく六 粟の葉さつし清の糸  
柳陰  
涼しきやさしふさむ心推うか  
如行

訪ふ苗さきり

推の本を ころく啼や輝のま  
採水  
目のりやふはふ 推う柳陰  
市陰

ふふさきり

採水 早苗のころけふの陰  
半残

まのねを おまを

一 採むこまや 多田のころけふのま  
之道

書音

一 夏ぬる 山さるくや 藤のまを  
魚町

夕まや 採木の 奥の一まきり  
及肩

界隈 梅樹

秋風や 田上ふの へりまよりの  
尚白

採む葉

あつこくもまに あつこくの ちきり  
小枝

木履ぬく 侍ふ 生さる 葉の糸  
木節

白紙の書

縫ふこと 草紙や 杖の糸  
扇

穂の糸を 佛のおまを  
智月

扇山や けりく 果せし 秋の風  
羽紅

桶の輪や きつねく 採むまを  
昌房

甲入のまゝたりし時のあつたふ  
啼やいとく 嗚ふわらうのこころを  
越人

越人といふく 後念を

蓮の葉のひびきを入菴うれ 等哉

明年の生るる菴

まゝあやましくも 果は夕のひびき 嵐叢

同夏

涼しきやけ菴をさへ 住持し 芳良

跋

信著者若芭蕉公の傍秘をく首頼也 汲以彼山寺  
偷衣朝市頂冠笑只住心感物写真而已 兵

洛下逸人凡兆夫未隨翁遊學謀銀竹窓躡号  
凌公斯有歲屬撰此集玩弄無色自謂絶  
超狐腋白裘者也於是以四方塗友憧々往來或  
千里寄書之中皆有佳句日蘊月隆各程文  
章我有一昆仲騷士不集餘者索居空廡柄為難  
通信且有菴倪婦人不琢磨者鹿言細諸為喜曰  
志雖至其域何棄其人乎哉果分西亭作六卷  
故不遑廣搜他家文林也維耽元祿四稔辛未  
仲夏余掛錫於洛陽旅亭偶會兆未吟席見  
需下紀此古是督尾卒接毫末不揣拙庶幾 甚高  
張有補于詞海漁人之云 凡在妙納  
本草漢書

正竹書之

續猿蓑

八九ろききく雨降る折くられ

芭蕉

まのうらすの畠あきぬみ

沾圃

初あき馬まのの羽織まそ

馬覓

肉ハとさつてく 晩のころゆひ

里圃

まのいへく目あきまの月の色

沾

狗脊うねく肌きこくかすれ

蕉

浪掃もさくく風よ吹れろ

里

孫く初くる祖父の倍浅

覓

狼指く智きりく くる旅刀

蕉

煤を志まへくくく 膝の辰

沾

物束の小き一さけあつたまきく

覓

十里まうり乃余所へゆくく

里

毎のまあ入山路押くおりるき

沾

あつぬう川をゆ門のきつり

蕉

りりくく後六沙居あき揚場を

里

や川とてゆゆにまの道つれ

覓

有唄まおろく花のまてあめて

蕉

くるるにそり入 教のまへく口

沾

まきまをまきまの薩れく紐まき

覓

伊勢のちゆくまのこりてを

里

まおろく小峯の仲るをくくと

沾

くくくくくくくくくくくくく

蕉



よまじまじくふるまふかのまぢきつるふり  
 むつうつりまじつる 山方の客  
 何のりもまじくしてめでたた駒込  
 風ふふふつるふら桐の穂の月  
 まま新秋の経居ふはるうくとく  
 産院のひまもと せき房時うり  
 明たつる伊勢の筆雨の年影う  
 著るふ 志くくそのうらぬ一徳  
 徳守も志めるまでまきこ花ゆら  
 まま静るふる竿の 際 纏  
 常のふふふふるまを 揮 鏡  
 あるふぬ 念と息く かなめでははる

里 荒 沾 里 荒 沾 里 荒 沾 里 荒 沾 里

春くくふるうらむのまくとやあつく  
 三橋 影賀の宿の うらむまう  
 けの宿よこまら 花子の 物 巻  
 あつうむまを まま川 刈とく  
 しくくま 寺の 花園を まま  
 宿の あつうの あつう 淋 淋  
 穢 うりうきまの まつうぬ 小高  
 卑下しうきまの ままよる 料理うふ  
 机入とく 秋ふたうらう 琴の月  
 秋ふこくまの 玉 毎の 香  
 けさるハ 宿の 舟の あつう 同く  
 むつ付くむら 物 舟の 庄内

里 荒 沾 里 荒 沾 里 荒 沾 里 荒 沾 里



あゝの あれと 帷子時のもの物  
ゆのそと 氣味よき 杉苗乃風  
花のうけ 葉をまき 結ぶもの  
あゝ 田の土乃 かつくひりふ

里 沾 芑

いさゝと 立寄り 引きゆる 出嵐哉  
あゝの 土まらたの ちかあゝゝん  
大根のそと ね ちゝん  
上下とも 入 煎茶 ぬい 杖  
町切 又 月くんの 江戸 集あ 沙  
あゝ ちゝん くと 通るる 次

里 沾 芑 馬 沾 芑  
里 沾 芑

あゝの 帷子の 結ぶもの ちかあゝゝん  
いさゝと の 後入 楓の ちかあゝゝん  
俎の 縮ふ あを うけ ちかあゝゝん  
目利と 家入 よん ちかあゝゝん  
あゝの 葉を 結ぶもの ちかあゝゝん  
あゝの 七代 ちかあゝゝん ぬ日の 教  
革の ちかあゝゝん ちかあゝゝん の ちかあゝゝん  
ちかあゝゝん ちかあゝゝん 綿の ちかあゝゝん  
ちかあゝゝん ちかあゝゝん ちかあゝゝん  
あゝの ちかあゝゝん ちかあゝゝん  
柳舟の 花の中 ちかあゝゝん  
柳の 侍人 門を ちかあゝゝん

里 沾 芑 里 沾 芑 里 沾 芑 里 沾 芑

百姓のたうとくせぬもせぬまじよ  
 こまめを獲よらへ先に行き本  
 漬物に漬かすつとせりしと  
 りふのゆりさへそよるともせぬ  
 砂を這ふ棘の中の絡線ギスのま  
 別をそへりひひせと  
 火種の火ひけく探さぬあつま  
 一石踏し一確り  
 赤  
 おくハ冥目の起る天を  
 仰かす加減のちうへあまを  
 肉斬りしとせりしあまを  
 かひのまうと甲一揃くを  
 里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟

自耕の娘をゆりし娘のまう  
 赤い糸のえんをとりし供え  
 花の中へ遊ぼううらやま  
 寺のひけりし山道のま  
 ちうへへすくろりし津の鴨  
 一両降しとあつとま 風  
 里 沾 菟 里 沾 菟

猿蓑ふもれたるおの松あけ  
 目をあきらめしと静なる息  
 ありし津の中よりあつて  
 藤竹まじりし葉をひらけく  
 沾圃  
 芭蕉  
 支考  
 惟然

鷗のあつるををくくきりし月  
 通るものまらふこんせつこの秋  
 を血志まの一本のさきさる鯨の魚  
 まる授の 雁をさるさうねり  
 智舟まきく西川ともせはてお終  
 中玉よりの 出の吉た右  
 船日の目ととてやうお終ん  
 一重羽織く失くさつたぬる  
 きさうん——まき青糸のほの楳楓  
 少——門あつるまら月の月  
 初あ—— 富の人のさけまら  
 あり際光る 溪の小 鰯

然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉

コんく通る紀三井のたの喉うり  
 ちのちひとりく——く永き日  
 ころ 風の又あまきり 共まきり  
 けり まきり 極をたるりくく  
 舟舟の内候ハまきりなまらう  
 望遠のさうまもむきとせねぬ  
 大せいのまら二日まきり首の澄  
 ちるまきりけり——中のさうり  
 まら細のまきり 皆まら流  
 奥の 世まら 通年一の他  
 海まらも客のまきりまらら  
 赤鷗のまら 庭の 正面

然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉

さきさき〜ぬ娘の 心元あつた 芭  
こぼれ汗のしとめると ぬれぬのさ 考  
もろい霧をほくろと かくまおの風 我  
大工つづひの ぬきぬき 芭  
米糲もろくろよと せぬろく 考  
う〜肩て 糸の中を 押あふ 蕉  
けあ〜うり 海生きたのけもまて 然  
野の けのまこぬけぬ まま 考

今宵月賦

野盤子  
支考

今宵八月月十六日のそらあふかよひ月かたの  
朧山よかけく夜霧あふ湖さうのねをうくむされき

と雪月のあそひさう〜もよりき早の 席さくらね  
とあさ〜 勁く〜う〜に人さ〜く〜はら〜て世を  
思ひ山をぬり〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜  
奥せ〜先び〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜  
と〜り〜ら〜に〜時〜は〜静〜の〜あ〜ふ〜ま〜う〜ひ〜あ〜の〜魚〜屋〜あ〜  
ひ〜る〜さ〜く〜あ〜そ〜け〜う〜ら〜る〜あ〜奥〜は〜湖〜川〜の〜舟〜屋〜あ〜は〜  
の〜ま〜ち〜秋〜を〜う〜た〜わ〜く〜い〜あ〜〜う〜ま〜あ〜月〜さ〜ら〜さ〜る〜あ〜ひ〜は〜  
澄〜う〜く〜冷〜か〜る〜の〜山〜中〜は〜父〜母〜の〜古〜屋〜境〜を〜と〜く〜ひ〜落〜ち  
後〜山〜は〜藤〜原〜と〜か〜は〜後〜祇〜園〜の〜涼〜さ〜ら〜る〜と〜く〜よ  
え〜は〜か〜く〜て〜や〜け〜い〜ゆ〜は〜秋〜を〜す〜く〜れ〜ん〜年〜と〜あ〜く〜ふ〜と〜年〜  
湖〜水〜の〜初〜雪〜を〜う〜す〜ま〜い〜て〜ま〜い〜二〜三〜里〜の〜暮〜暮〜を〜待〜て  
さ〜る〜ふ〜草〜鞋〜は〜あ〜る〜を〜と〜く〜む〜今〜宵〜月〜は〜甚〜長〜浪〜氏〜は〜あ〜る〜

うして傍あり傍あり傍うして傍ふれりものなり  
 その交のちかたのふ砂川の岸よ山をひきま  
 りとく一海うらなふとくは川海ありとく人あり  
 るとあり一雲深たつとく人くくめとく一むきと  
 こすうらにありねとおのつとくよとく人なり  
 うらひとくおとくは鶴傳と月よりとくまらるるま  
 裏をあらはは河野も古きとくの方とく一やとく  
 とくま考ハハの書の方不後とく求とく附雨のはま  
 むとく人せとくたとくおのつとく一たつとくを海うみのふとく  
 の中とくとくうとく一とくまらるるつとくはとくおとくは  
 うらむとくま年とくのとくまらるるのつとく一海とくはとく  
 らは今とくをの奥宴何とくうとくまらるるつとく一碎と

初めものめくつ討書の ねくつとくをのませんと  
 たとくつれあひぬ

なるの書や山崩と崩と冷と物  
 書後ハとくつとく一 甚の 極先  
 常ハハのつとくその初よとく入とく  
 古き 草の初よとくな故とく一 込  
 月影の書もちつとくよる 雲のたみ  
 高まらとく一 沙をたつとく 高うとく  
 核を初場の初人 進とく一  
 山うとくつとくよとくをとく 物に  
 極極ある 面極とくよとく一とく手後

芭蕉  
 曲翠  
 卧高  
 惟然  
 支考  
 芭蕉  
 翠  
 高  
 杉

せめてエまを志つる 照降  
あれくろの 舟にまゐる 橋の裏  
お佛のうらよ 夕日さう 返  
平畦の草を看する たるを  
秋風りさる 門の 吾風 呂  
馬引く 娘ひ 初る 月乃 秋  
尾張さうき 一のあ 名さあ  
餅好のこころの 花あ ならむ  
正月 舟の 襟もよこ さら  
まら 風よ 常侍の つめい じゆん  
藪さう 村人 ぬけさう じゆん  
喰うぬぬ 智も 賢も じゆん

考 蕉 考 芭 考 吟 言 翠 蕉 言 吟 考 翠 蕉 考

何その時か 山伏さ かり 於  
あつとま 持し 付さう ささみ 紫  
麓さうさう 舟 月 舟く 末  
お 舟と 船先さう さの 舟  
陰の 目あり 舟の 舟を  
若さうさう 舟を ぬ 酒の 引さ  
若さうえの 舟を ぬ 舟の 舟  
封付し 舟を ぬ 舟の 舟  
そらうく ありく 舟の上 舟  
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟  
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟  
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟

言 翠 芭 考 蕉 言 翠 芭 考 吟 言 翠 蕉 言 吟 考 翠 蕉 考

大キス 蔭のとんよ 竹の  
生さうら 花のよ 庭か 上をく  
倭のけつ 一 為 柳乃下 言 考 終

春之部 花樓

温石のあつろく 赤雲をい川櫻  
寝の財かよ又と母を月さる川櫻  
顔よ似ぬ不るも物よ初さく  
ちうくをや木の櫻くろく花の山  
角のれ 一人まう くらや花の香  
花散るく竹ころる 柳の中さう外  
其角 芭蕉 洞木 文中 西堂

尹店沾

富きあつる 海をふむそのて 文君の  
血まを酔のまはつたふあひのそららるるよ

酒の都を全とびうのまをふまの 花 惟然  
賭うく 博をさるるうきさく 支考  
入のよまもかく 窺りくまの 柳 沾徳  
その 日や世の中 の花乃 山面 猿薙  
七のよう 花を全とびうの 女中 陽和  
える ぶあひのいあやまのさく 乙刈  
咲たもむらう けらる 老木 木苺  
あをまや 花を全とびうの 柳 沾荷  
二の 柳やさうら 吹返 柳の鼻 子珊  
葉を虫の 出方よひく 柳 車袋

田家

菖蒲の 名おとまんや由様  
咲かふる 花や 飯采み 十石  
山門は 花ののくし 木のさくら  
かうれ 木の根や あらる 花の樹  
花のまを さつせき 似合身く 入る 花  
く 花の中うま 花の 多を 花のま  
ぬく 花の 花の 花の 花の 花  
一日く 花の 花の 花の 花の  
ハき 花の 花の 花の 花の

と菜

花の 花の 花の 花の 花の

李里  
桃首  
一桐  
如雪  
其角  
一撃  
草袋  
沾圃  
全

嵐雪

花の 花の 花の 花の 花の  
又 花の 花の 花の 花の  
一 花の 花の 花の 花の

梅 竹柳

まもや 花の 花の 花の 花の  
花の 花の 花の 花の 花の  
守 花の 花の 花の 花の  
里 花の 花の 花の 花の  
花の 花の 花の 花の 花の  
花の 花の 花の 花の 花の  
わ 花の 花の 花の 花の 花の  
花の 花の 花の 花の 花の

曲翠  
梳屋  
尾頭

芭蕉  
毋水  
其角  
昌房  
良品  
万平  
真日



ちしむるやたしうま遊もるきやう  
大丹 千川

天の神のやううの痛て

身よつけくちるや梅の影をま  
遊系

そまのの影のきりや梅柳  
千那

附くくちるやうちうり川やま  
意兒

ちうらるを教へちうちや古柳  
李田

青柳の志くちるやまの曲  
九若

柳さうけくちるやま通る柳介  
巴丈

るる 附集

山よよち力うちる美塵う形  
其角

うちの山にや柳の風をわうり  
史邦

きりうまのりて体ちひかちうり  
智月

きりや柳のうちうち教のま  
芭蕉

澄ききもあけけと新のちうち  
冬来

まきうちや華のうちうち新のま  
酒空

弱きもの月のさやうちうち新の  
傘下

にまきもりまふ似合きうちうち  
長虹

蔭や田をわうちうちうちのあや  
野童

らあの中や身をぬくちうちうち  
少年 峯尻

雀もや柳のうちうちうち離の松  
槐市

蠅うちうちうちうちうちうち  
河瓢

り鴨やうちうちうちうちうち  
為常

芳野西河の流

鮎のつみの 蟹のまきり 鮎のまきり  
かけうやと せまちうくく 小鮎の  
ちう魚の 一うこまうや 改めあるを  
白魚の ちうくく 鮎のまきり

海川とあそびく

あう魚をふるひまうるはようち  
其角

まきり

やうくても せまちうくく 小鮎のまきり  
美野や ちうくく 鮎のまきり  
まのの せまちうくく 鮎のまきり  
川 せまちうくく 鮎のまきり  
青の せまちうくく 鮎のまきり

周指

味の中 採の 花の よめうくく  
羨まうくく 嘆き ちうくく 鬼あま  
埋うくく ところ 山 せまちうくく 鮎のまきり  
踏まうくく ちうくく 鮎のまきり  
あま ちうくく 鮎のまきり  
早 せまちうくく 鮎のまきり  
みと せまちうくく 鮎のまきり  
日の せまちうくく 鮎のまきり  
浦 公 英 ちうくく 鮎のまきり

猫意 附 蜘蛛

ちうくく 月 ちうくく 鮎のまきり  
うくく ちうくく 鮎のまきり

車乘 葛雀 馬寛 拙侯 乃龍 正秀 夕可 一桐 團落 探丸 支考

おのひうねその甲あけり世猶分 三 己百

白日志何く也

とまうとも 翅ハ動くは蝶分 柳梅

夜交まのうらねやきと蝶の羽 唯然

蝶の草あつる様ふうううくぬ 周指

風吹く葉のゆきうる小蝶分 重行

まを蝶くく花ふせりまは蝶分 雪窓

春鹿

振印くく けや度世の年の角 沢雉

まき耕

妙好のすく名わくくさくく 木良

苗れやまき後まきの青月夜 此節

十刈の田をうとあつ難分人 一筆

桃 附椿

白梅や志川くもさるはまのま 桃隣

今梅のまことあまう 露の花 夕哉

依るくやまの程の上のま花のま 雪芝

梅さのま中まあまのまのま 其角

まのまのま 柳やまのまのま 其角

いまのま 由らまのまのま 其角

おろく 経まのまのまのま 其角

小福綿ふまを中を 角上

梅のま 花のまのまのま 残香

花あけくくまのまのま 河水

ちかき積りあまのりつた積りたる 舟坂

歎冬 附 脚跡後

山崎や 顔より干しうら 暮一き 園指

田舎の 人々 對し

少雪も 積るるを 雪の 解けを 雪の 西堂

地も 雪つしみの 梅や 蜂の よう 雪芝

藪崎や 積るるを やくく 雪の 花 荆口

庚戌月

山の 狩と ちかき 雪の 月 雪野 魯町

雪の 雨 附 雪野

およりの 雪の 雪の 雪の 雨 荆口

雪の 雨の 雪の 雨 乃就

〇〇〇

雪の 雨や 唐丸の 雪の 雨 遊刀

雪の 雨の 雪の 雨の 雪の 雨

雪の 雨や 梅の 雨の 雨 支考

雪の 雨や 雪の 雨の 雨 桃首

雪の 雨や 雪の 雨の 雨 風表

雪の 雨や 雪の 雨の 雨 風表

改行

雪の 雨の 雪の 雨の 雪の 雨 玄表

雪の 雨の 雪の 雨の 雪の 雨 園指

新書

雪の 雨の 雪の 雨の 雪の 雨 評六

雪の 雨の 雪の 雨の 雪の 雨 風臨

まつたこの木のそとらやらまら  
 うけらうや 麓の標の掛らうら  
 山をたふさふたふたのれや 龍谷の家  
 あまのこら 龍谷や おのこらの中  
 はのこら うらや 存らうらまや ねけま  
 まらの 目や まの木の 中れ中まら  
 三天の 龍をたふらうらまの地  
 引まらの中ら まらや 田標らうら  
 三月まら  
 標を白はうらまの 名をたふら  
 山標  
 まらやまらうらまら 水

土芳  
 配刀  
 万平  
 菅種  
 均水  
 正秀  
 仙化  
 支信  
 支考  
 武仙  
 少平

蓮道入まのうすうのま所  
 まらや 幹をたふらまの 里うら  
 まらまのうらうらうらうら 標の貝  
 母まの ぬまらうらうらまら七 始  
 竹まのうらまらまらを頼倒すまら  
 まらをたふらまらまらまら 竹れま  
 え目や まらうらまらまらまら  
 んまらまら まらや 鏡のうらうの標  
 まらまらまらまらまらまら 其角  
 標の母まらまらまらまら 嵐雪  
 まらまらまらまらまらまら 木未  
 まらまらまらまらまらまら 土芳

百歳  
 尚白  
 圃落  
 山峰  
 千川  
 芭蕉  
 其角  
 嵐雪  
 木未  
 土芳

くわんまきやよくはくさるるを調法 風臨

ふらまきをまうけく

元日やまきこにけりりのは海乃花 猿雖

ふたやあふまきのあけやあけひくまき 葛葉

脊まきくわいあおをうたやあけのま 聖臺

齒あきのあふくまき包尾の網のまき 耕雪

鮭のあきのまきをうく初日か 九柳

くわいまきやまきあきの白比丘元 前川

批起のまきの初日まき 斜嶺

あきのまきやあきのまきもあきのまき 山蜂

湯のろや大かきくけの初日か 任行

元日やまきこにけりあき稲のあき 行戸

〇リ十七

あやまきのまきをうくまき 甚糸

橋あきのまきをうくまき 沾圃

あきのまきのまきをうくまき 圃角

夏之部

郭公

晴の電をささくつやわくまき 其角

ほくまきあきのまきをうくまき 本中

あきあきのまきをうくまき 多良

あきのまきのまきをうくまき 友考

あきのまきのまきをうくまき 如聖

あきのまきのまきをうくまき 芦本

院よりも山芳田ふるけり〜子規

ゆふぐらふ山の梅森とて此れの家とて通るるを

郭公うららの森や中やとら

沾圃

木附草花

橙や日よこらとて〜るる木立

園坊

里〜の 次めらるるぬるる木立

世秋

園中 二句

け中の十もふりり九枝の花

此筋

手切のやまも 梓の若葉あか

千川

姫百合や上より〜るる 蛛の糸

素糸

題山家〜百合

あ〜るるや〜るるをた〜るる百合花

七考

このころの〜るる〜るる 杜若

尾頭

〜るる〜るる〜るる〜るる 杜若

沾圃

〜るる〜るる〜るる〜るる 杜若

イカ 室多

〜るる〜るる〜るる〜るる 杜若

杜候

〜るる〜るる〜るる〜るる

〜るる〜るる〜るる〜るる 杜若

沾圃

〜るる〜るる〜るる〜るる 杜若

芭蕉

〜るる〜るる〜るる〜るる 杜若

夫 岩紫

〜るる〜るる〜るる〜るる 杜若

砂香

〜るる〜るる〜るる〜るる 杜若

此筋

〜るる〜るる〜るる〜るる 杜若

白雪

〜るる〜るる〜るる〜るる 杜若

白鳥

瓜

新嘉坡のよき種を採り瓜の虫  
唯あつたや種を入るもまうくに

ひん

森あつた種を採りぬむむ

早苗

系入やまの田植のゆづ

早乙女に誘んこゆんまの奴

ふつと身の植をくれま早苗

田植をまてるる種を視ひ

一田つくりあつたやまのま

里のまの種を採る早苗

甚甚  
至曉

風弦

卯七

園指

魚日

重山

北枝

支考

螢

螢を採人の畑をめぐりあつた  
三日月又まのの螢を採り

納涼

涼しきや竹を採りあつた

せむ花草や廣く採りあつた

源川の菴を採り

とせぬまの風を採りあつた

涼しきや竹を採りあつた

るぬや裏門明くあつた

涼しきや竹を採りあつた

漫真 三万

許六  
秋萩

半残

惟然

史邦

台峯

牡羊

万守



櫻うけと申ふ深き階のり申  
 涼のさや極より日さすうさけ  
 けし癖を知らずしころる深なる  
 とは深き井をふすなきて  
 涼風もゆきし一層のりけ  
 りそりしき中をぬかす深き  
 とあつし人よさすうぬく深き  
 黙然とさする深きふの上  
 職人の惟ふさううさすみ  
 痛しきや一き相織の風も深  
 新涼やひつひのりさ六月うさす  
 里圃  
 我眉  
 正秀  
 全  
 遊刀  
 志考  
 名芝  
 西堂

巻五

ロリ林

うさすや思ふうさすりし夜の潤  
 事あさるるころ安のちころの思ふ  
 兼て医者ふのりさふさふさふさふさ  
 実ふもく六法く一層登の異名  
 乙草の内のあつさや梅はらひ  
 梅さうう一日雪の川一層所  
 羨ゆふ極もさすうぬ思う那  
 糸の片や異を月うさうに  
 あつさ日や扇をうさすのりさ  
 積あけく異名さし思ふにさう形  
 積うあけ 蛇も秋のあつさう形  
 とさすれを此川とうちやの異名  
 妙哉  
 万平  
 正秀  
 乙刈  
 怒風  
 素流  
 素流  
 草袋  
 里東  
 沾圃

竹の子

筍又ぬそらく 山崎の 山崩うね

可誠 曲袈

五月雨 附文三

あつと涼きや 青くもたつて 徴雨の岸

不玉

さみうねや 琴空かへ 桑の 畑

菅菘

五月雨や 踵よとねぬ 後つゝみ

沾圃

夕まゝさう 合さうり 日傘

拙候

白雨や 葦の 葉あつて 池の岸

菅蘇

夕ららや ちりし けつる 竹の皮

曉鳥

ゆわらう 傘うゑ 家やま 一町

圃水

蟬

白雨や 中々つゝと 梅の葉の

正秀

きつ川と 来る帰る けつる 梅の葉

胡故

葉の 蝉涼しき 葉のや ちりし 葉

乙州

蝉啼すぬの 戯る 葉の 葉の付か

曉鳥

うねを

葉の 白や 葉とあつて 川うね

葉拾

雑夏

夏中 梅しと 梅の 動を 心 園う 那

杉凡

虫ちり 喰り入る 葉とあつて や 葉の 畑

荆口

夏 癒も 移るのの 叶の ひとつて

聖真

川 物よりて

あつ 畑や まゝうゝと ぬき 柳 籠

文鳥

芙蓉草に赤うらうらや園のはなは  
夕園へあつてもあつても酒を  
著常  
み酔

魚のつる幸もわれ借うちを  
重菱  
三見

柿のまや荒うらむく日の西  
水臨  
聖妻

蛸牛 後の引 名のそよま  
水臨

晋の潤明をうらむ  
惟然  
在哉

定形一 屋中持の 意や昔草  
惟然  
在哉

粘とらる 惟子うらむ 意中持  
惟然  
在哉

篇一本うらむ世よま  
惟子の 移るひの 中へ 一 紙五百  
支考

秋の部

名月

名月又 葉の意や 田のころり  
在哉

名月の 名や 名を 棉の 田  
ころり 竹葉の 中へ うらむ 名月の 秋の 意を

とら 一 中へ うらむ 意の ころり 葉の 意を  
ころり 竹葉の 中へ うらむ 名月の 秋の 意を

とら 一 中へ うらむ 意の ころり 葉の 意を  
ころり 竹葉の 中へ うらむ 名月の 秋の 意を

あまのつねく平田戦くと星まうらゝ老若  
 摩訶不思議のついでにいふもつゝもつゝもつゝ  
 その次の将をうけいふもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 やうやうのついでに今のついでにいふもつゝもつゝもつゝ  
 月のついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 年とついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 に陰のついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 前六歌集をむねとついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 ちとついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 かまむつゝもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝ

支考評

名月の海より吟る田養子郎

酒堂

〇リ 三三

明月やあまのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 そのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 あまのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 名月やあまのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 明月やあまのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 明月やあまのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 中切のあまのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 名月やあまのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 明くく遠くのあまのついでにいふもつゝもつゝもつゝ  
 ねむいあまのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 明月やあまのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 名月やあまのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝ  
 名月やあまのついでにいふもつゝもつゝもつゝもつゝ

如行 露沾 智月 園指 涼糸 不玉 配刀 丸柙 圃水 山峰 爪国 雲英

老の身はさき昔の身は 肉は心  
明月はうららかに 星はちかぬ  
泥步 正友

三つ三つ付

二つ三つとて 彦根あつねの 月とて  
芥子とてと 物まてりん 月とて  
村のまのの ちゆとて 月とて  
少々のちつこも 持ぬや 月とて  
名月や 里の ちゆの 月とて  
場は 居る 月とて 月とて  
明月や ちゆの 月とて  
明月や ちゆの 月とて  
野菫 丹楓 利合 木枝 宗比 如真 空牙 土考

三ツ三十四

花入の ちゆの 月とて 正秀

三つ三つ付

舟引の ちゆの 月とて 大草

秘しとて ちゆの 月とて

姨姪を 園の ちゆの 月とて 沾圃

赤らおきとて 月入あつねの 月とて 馬寛

若うつとて 月やちゆの 月とて 里東

月影や 海の ちゆの 月とて 牧童

三つ三つ付

川上とて 川あつねの 月とて 芭蕉

十六卷入りつらな園あり神介  
ゆきよの六園の名をきくしそよのた  
猿蛙 全

七夕

文のやまの田の上のあまの河  
望を合をうんききしほれねくしに  
取形りの雲をきくしやありの教  
あかもくをりつある部よのきき  
秋風や薰風の園もちり  
乙州

立秋

雲あつとくをくしけりよるを秋  
秋つらみの中を吹くく雲の華  
乙次

籾首

〇ノ千五

秋風ののた透 通に格紙 外  
卯工あもろくしね格紙のつらみ外  
女ら神をわのぬ馬骨のたき外  
とまもるへし 格紙のたきあつら  
一かゆへ 花野ふらしし 物る  
う 園 とうにききや 甚そらま  
支浪

鶉芭蕉庵

百合のさき 甚き雲をきくし  
ちよねのたきまもる年一つまね花  
枯のあつる 甚き物うしや鶉芭蕉  
鶉のたきまもる年一つまね花  
鶉のたきまもる年一つまね花  
至曉

柳梅 鶉 濁子 鳥栗 支浪 風友 史邦 万平 芭蕉 至曉

おしこや雨戸ふさふさ 萩のこゝろ  
昔のまゝや 秋の勃く 萩の風  
山人の まゝを 志を ね 昔のこゝろ  
風を ぬり 長を ぬり 昔のこゝろ

萩のこゝろ

萩のこゝろの 萩のこゝろ 人 為月夜  
あまのこゝろの 遠のこゝろ 萩のこゝろ  
あまのこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ  
萩のこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ

虫 雨鳥

きつねのこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ  
竈のこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ

火の消る、胸ふさふさの 萩のこゝろ  
萩のこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ  
萩のこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ  
萩のこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ  
萩のこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ  
萩のこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ  
萩のこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ  
萩のこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ  
萩のこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ  
萩のこゝろの 萩のこゝろ 萩のこゝろ

秋風

可南  
北枝

正秀  
水島  
杜若  
探丸  
葛葉  
水峯  
夫草  
馬菟  
氷固  
支考  
芭蕉

杖うせや二番うせの杖うせ付  
 雀子の 杖うせもあやや 杖の風  
 何よりとうとうとう杖の風  
 松の葉や 細きうせ杖の葉  
 どのつらう 草乃ちあまを叶ふ  
 ふんとうや 叶ふあやううら  
 われくく 葉の葉は せふ  
 游刀 式之 考 風國 圃燕 九節 猿雖

縮妻

ひらうとうとうあまを叶すく 縮の後  
 縮妻や 葉うあやううの海  
 明りのや 縮くまあやうの海  
 のるつらう 園内方ち 縮の葉  
 一東 宗比 吉芳 芭蕉

木實 附菌

園葉の 葉くあやううを叶す  
 岸を焼く 葉くあやううの海  
 秋の葉や 葉くあやううの海  
 つらうと 葉をのりく 葉を  
 木實の 葉くあやううの海  
 高有 虎 酒堂 葉 沾圃

何れかの山中へあまの

杖うせや 葉くあやううの 形 惟然

杖うせや 葉くあやううの 葉 芭蕉



楓

後庭の塚すなわう 村の紅葉

北鯉

鹿

屍す少に 秋の鹿や風の音

風腫

鹿かへりて 麻のうらみ

一敵

農業

起しやうく 途より 暮まの光

車庸

木のむく 狸 ぬけり 移りぬ

賞山

さまじはる 乃もぬき 晴の橋

如雪

浮世の半徒 入道家をさる

暮まの光 乃もぬき 晴の橋

芭蕉

早稲刈り 考りまうや 小百姓

乃龍

コソコソ

山雀の心とや 江の浦 葉のうら

牛徒

弄りよまう 河原 鴉のうら

古考

一帯の 葉や 草のうら

全

秋の 葉や あり 暮まの光

惺然

百のうら いろく 橋を 暮る

水長

大津の 葉や あり 暮まの光

そのつらや 西風 上戸の 花の 程

沾圃

菊

公卿の 葉や あり 暮まの光

葛葉

あやう 葉や あり 暮まの光

濁子

考りまう 葉や あり 暮まの光

古考

秋昼展

夕涼のそよ風やうららかな山道の菊の香  
風巻  
傷つるけしき亭の燈や夕べの露  
文草

暮秋

夕涼のそよ風やうららかな山道の菊の香  
世あ  
けしきを詠うの糸の眼 乙州  
けしきや夕涼のひらけける露のひ  
昔菴

雑秋

あふたしは雨をうらやまして穀一ツ  
之石  
粟ふらふの山家作しきおのけ  
園友  
あふたしは雨をうらやまして穀一ツ  
畦止  
秋の夕涼のひらけける露のひ  
口友

二九

夕涼のそよ風やうららかな山道の菊の香  
秋子  
けしきを詠うの糸の眼 万平  
けしきや夕涼のひらけける露のひ  
宗波

夕涼のそよ風やうららかな山道の菊の香  
けしきを詠うの糸の眼  
けしきや夕涼のひらけける露のひ  
夕涼のそよ風やうららかな山道の菊の香  
けしきを詠うの糸の眼  
けしきや夕涼のひらけける露のひ

世あ

夕涼のそよ風やうららかな山道の菊の香

萬乃穂

多之部

附録

この頃乃 植乃 結目や 之川 附録  
 志られ 中々 又 松尾の 島 之川  
 久み 之川 今も 年々 九 初 附録  
 一 附録 之川 之川 之川 日 終 之川  
 初 之川 之川 之川 之川 之川  
 平 押 之川 之川 之川 之川 之川  
 柴 之川 之川 之川 之川 之川  
 梳 之川 之川 之川 之川 之川  
 完 之川 之川 之川 之川 之川  
 之川 之川 之川 之川 之川

三十一

之川 之川 之川 之川 之川  
 身 之川 之川 之川 之川 之川  
 之川 之川 之川 之川 之川  
 之川 之川 之川 之川 之川

之川 之川 之川 之川 之川

之川 之川 之川 之川 之川

沖 之川 之川 之川 之川 之川  
 之川 之川 之川 之川 之川  
 之川 之川 之川 之川 之川  
 之川 之川 之川 之川 之川

之川 之川 之川 之川 之川

蘭園之遺

之川 之川 之川 之川 之川  
 之川 之川 之川 之川 之川  
 之川 之川 之川 之川 之川  
 之川 之川 之川 之川 之川

中へは菊の花のくはつ別を飾と  
しつち居るうらうら展き物  
のまゆりーまきうもわくわく  
秋菊を飾とて人々をすもれ  
なつゆにまらぬ

芭蕉

菊の清香や 庭を切らるる履の底  
種ゆきや 起あつくるる菊の香  
葉のまき味あつるは 桃や 題の中  
八月の 箱や あつまるる葉の香  
何れ息のつかさうも まん葉の秋  
菊 香も 園作をまうくまう  
柴葉の 隠すも 終の 終を 粧し

其角  
桃隣  
沾圃  
馬寛

思ふは葉の梅の天をうらうをひき  
わり遠くもうらうもふらふらー今も葉  
まきまひくまのうらうもまきまひ  
ひきまひくまのうらうもまきまひ  
たふふあつるやとて人見竹洞を人  
まあまをまきまひくまのうらうも  
うらうもまきまひくまのうらうも  
まきまひくまのうらうもまきまひ  
まきまひくまのうらうもまきまひ

うらうまきまひくまのうらうも

素堂

草 附木

あはれや 法少殿をわく 月の透る

曲家

かうを清く吹やまらうらのみ花  
あ仙の 花のうれやまやうき  
水圍 惟然

范蠡の 趙南のきりきり  
山家集の題より入

一冬もとあうぬ 葉のぬらぬ  
山家集花ハえより 開くゆら花  
まら梅のひとけりふら 葉のま  
ゆら葉のたもまらくやまら 葉の積  
車廂 土芳 露笠

本集 附まら 果  
おのひま 木の葉ちる 葉のまら  
甲まらくはの葉ちる 葉のまら  
まら川やまの葉ちる 葉のまら  
惟然

コリ 三三

禁より 且まらう 木の葉のまら  
枳風

お柳葉集の 葉をまらねて

まらまらう まらまらく まらまら  
枯くまら まらまらく まらまら  
牛のまら まらまら 葉のまら  
まらまら まらまら まらまら  
草まら まらまら まらまら  
まらまら まらまら まらまら  
木のまら まらまら まらまら  
風や 脊中 みるく 牛のまら  
まらまら 刈田の 葉のまら  
こまら まらまら まらまら  
一道 杉風 桃枝 乃珍 利牛 支考 智月 風介 惟然 塵生

夷 儀

あはしき 儀 那をまゝ 袴をきき たり  
あはしき 儀 警も 鴨を成 たり

芭蕉 利合

鳥 附 也

のゆゑの 海をまゝ

塵埃をまゝぬ 月をまゝ 浦を  
追うけく 巻をまゝの 千をまゝ  
小鼓あらし 巻をまゝの 舟を  
入海を 巻をまゝ 帰るを  
敵をまゝ つまみくぬく 鴨の足  
たけ 鴨をまゝ 追うけく たり  
汲汲をまゝ 入るをまゝ 海を

白空 芭蕉 大草 園松 芭蕉 衣水 利雪

うろくと 海月をまゝ たり  
見え 透や 子持ひも のり 水  
一 塔を 初白魚や ちり 前  
かく ありや 松をまゝ たり 教

車庸 位水 杉風 拙候

杜史 魚の 海梅の 大をまゝ たり 海を  
載の 川をまゝ たり たり

冬 月 附 余

雪の 月 門をまゝ たり 月  
あはし 猫の つけ せ たり 月  
あはし 月 入るをまゝ たり 紙を  
あはし 門をまゝ たり 海を

里圃 大草 小春 支考

埋火

埋火のや 燈ろう入家の敷をうし  
焼くはく 杖のこころをうし 燈ろう

芭蕉  
桃先  
洞水

雪

初雪のや 門を掃くはうらるる雪  
初雪のや 自ら雪うはき 河井保  
雪のあつれみの うらるる雪をうし  
鶴鶴 家入とさうくそつれ雪  
雪のあつれみの うらるる雪をうし  
うらるる雪も 草鞋をうはきうらるる雪  
片「雪」のや 雪降くはうらるる雪

其角  
全  
冬菊  
祐甫  
葛原  
支考  
圃吟

思のほろろ 雪のうらるる雪  
終判入 雪のうらるる雪  
伊賀大 雪のうらるる雪

大系  
陽和  
死刀

神楽

神楽のや 雪のうらるる雪

史邦

海老

海老のや 雪のうらるる雪  
海老のや 雪のうらるる雪  
海老のや 雪のうらるる雪  
海老のや 雪のうらるる雪

洛系  
馬寛  
行六  
沾圃

煤掃

煤掃のや 雪のうらるる雪

珍香

焼くさまやあつあつやうさまあし	才をばしやうさや	焼くさま	焼くさま	焼くさま	焼くさま	焼くさま	焼くさま	焼くさま	焼くさま	焼くさま
あま	えん	てん	てん	てん	てん	てん	てん	てん	てん	てん

大牟や 宛まよ てるてるの 坊さるひ	狩きぬ 智急余の 糸たくれ	赤とちん小豆も 市の 師交か	引猪の 一つゝ浪やと	桶の 端の ひろの	天鰐の のよの	浅花の 草花 結草	はるの 圖の 目	のあつと	たれた	あし
萬平	李由	左角	正秀	荻子	猿鯨	惟然				



盗人ふまゝつゝおもひの年のくれ  
 余あゝ福とてんすの世々の年忘  
 閑ふら梅ふ 望むぬ年の中  
 節季のりや 弱うて海に教の中  
 昔々のりの 拍子をとるに明を介  
 裁層へふ志のうらみりまぬ紀  
 一まきう 啼や静り 陰影の鶴

古考  
 土芳  
 尚白  
 桃後  
 山峰  
 利合

小屋風ふと葉を挽うるまうと外  
 極行ふは月さゆ 乃の端  
 井のふりのわううふまうまき  
 まきまの也 山伏村の長作くま

斜炭  
 土芳  
 李下  
 仙杖

○ソ三六

糸くくらと女のわけや古就  
 火焼くう 梅うらぬふ 雪まき  
 山陰や 篠の流 柳くま 日向  
 翅ねえん 夢の根のまき 介  
 菊刈や みるく せいの 壺ふ

圃仙  
 雪芝  
 工谷  
 占圃  
 杉風

涅般木 涅般木 附追言 哀傷  
 涅般木 涅般木 附追言 哀傷  
 涅般木 涅般木 附追言 哀傷  
 涅般木 涅般木 附追言 哀傷

涅般木  
 涅般木  
 涅般木  
 涅般木

灌佛

灌のやつしきりある丹のやね  
不玉  
儀併や 新造と程度六徒分と  
之乃

鬼祭

管おももまふあさうー魂まうり  
嵐聖  
あふゆらりのうーくやうき魂まうり  
夫未  
やあゆら 坊を中ふ魂まうり  
沾圃

甲戌のふち律のゆーをこのまの  
あさうり 溜をせしめ六四果  
ゆーくまふをゆーまゆー

家のふらふ 杖ふまう 杖のふらふ  
芭蕉

悼少年 二

かひーこや 麻糸の着おとぬ  
惟然  
その糸をさるぬそのあふ秋の風  
支考

首のふらふ 袴のふらふ  
水首  
さう 糸や袴のふらふ 袴のふらふ  
支梁

糸糸

袴のふらふ 袴のふらふ  
沾圃

臘八

揚をさうらうて 袴のふらふ  
許六  
ゆのふれうのふれうのふらふ  
如行

雑歌

袴のふらふ 袴のふらふ

開帳の母

旅の母 智月  
 乙州  
 支考  
 惟然

旅之部

送別

送別 惟然  
 旅之部

旅人の立ち居るも 似よ 惟の夜 昔哉

留別

留別 昔哉  
 旅の母

甲斐の母

甲斐の母 惟の夜  
 旅の母



